
ONLINE

niziya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONLINE

【Nコード】

N9691Z

【作者名】

niziy a

【あらすじ】

どのような感じになるか試す意味で、未改訂の第一話をそのまま転載してみました。なお続きは「<http://bookshelf.jp/novel/online/index.html>」に掲載されています。

授業中にも関わらず、俺はボンヤリと窓の外を眺めていた。
退屈だった。

だったら授業に集中しろ——と言われそうだが、やる気がでない。
スポーツで発散しろ——とも言われそうだが、だるいからパス。
趣味に没頭したら？——と言われても、趣味らしい趣味が無いの
で無理。

欠伸をひとつ。

授業に意識を戻すと、老齡の歴史教師が17条の憲法を黒板に書
いていた。俺はブレザーの内ポケットから、スライド式の携帯電^{ケータイ}話
を取り出して、ゲームを立ち上げた。隣の席に座る女子が睨んでき
た気もするが、チクる様子もないので放っておくことにする。

しばらくすると放課後になった。帰り支度を済ませ、ボーツとし
ながら教室を出る。

クラブ活動はやっていない。やる気がおきない。ゲームばかりし
ているという噂の電算部に入りかけたこともあったが、上下関係が
面倒なので最終的にパスした。とはいっても、帰ってもやることが
無い。いつものように、登下校路の途中にある繁華街でゲーセンに
寄ることにする。

席が空いていたので『Ultimate Swordy』
という対戦格闘ゲームで軽く遊ぶ。

キャラ選択をランダムセレクトに任せると、ゲームの主人公格に
あたる黒衣の剣士になった。コマンドやコンボは全キャラ分、すで
に覚えているので、俺はそのまま、CPU戦を始めた。

1 戦目の蜥蜴人戦は完勝。

2 戦目の斧使い戦も楽勝。

3 戦目は刀武者——と思ったら、乱入された。

乱入者の選択キャラは、黒衣の剣士と同系統にあたる細剣の女剣

士——スペック的には黒衣の剣士より上とされている——だった。もっとも、いざ初めて見ると、このキャラの持ち味といっていい中上段と中下段の使い分けが単調すぎて、話にならなかった。

ゲージが溜まったところでエクストラスキル発動。小下段、中上段とつなげて乱舞系の超必を発動。これで終了。退屈だ。

と、乱入者は再びコインを投じてきた。

今度の選択キャラは、小柄な大剣使い——このゲームの隠しキャラだった。

俺は少しムツとした。

こいつは反則級のスペックを持っている。スピードが速く、攻撃レンジも広く、隙も少なく、ゲージも溜めやすい。おまけに超必は回避不能。盾騎士であれば逆に力まれるが、スピード系では1本とれば上々。そんな反則級のキャラであるため、特殊な操作をしないと選択できないようになっている……

案の定、早々に2本とられ、俺は負けてしまった。

「……………」

後ろに“待ち”が居ないことを確認。連コインで再挑戦する。

選択キャラは——黒衣の剣士。

また負けた。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。敗北。

連コイン——黒衣の剣士。1本とったが、敗北。

100円玉が尽きた。

「……………」

ムカついた。なによりムカついたのは、最後の対戦でコマンドの入力ミスをやらかしたことだ。それも超必の出し損ないだ。

俺はムカついたまま席を立ち、外の出ようとした。

今夜は家で前作のコンシューマー版をやりこもう。すべてはそこからだ。

——ヴーン、ヴーン、ヴーン

不意にケータイが震えた。メール着信のバイブレーションだ。メールは叔父からだった。

——ゲーム、好きか？ 好きならくれてやる！

少しめまいがした。

前から思っていたことだが……俺の叔父は、どこか変わっている。本当にこの人は、あの“石橋を叩いて渡らない”がモットーの親父の弟なんだろうか。職業もよくわからないし、いい歳としなのに浮いた話も聞こえてこない。

ともかく。

俺は本文を空白のまま、『YES』という題名で返信しておいた。

0 1 - 0 1

```
| Login Account : 4 3 6 - 3 3 2 - 2 0 0
4 - 9 7 1 9
| F A L C h e c k : . . . . . O K
| B i t a l C h e c k : . . . . . O K
| L o g i n C h e c k : . . . . . O K
| L o g i n T i m e : 2 5 / M a r c h 2 0 X 0
1 4 : 0 1 : 4 6
| L i m i t T i m e : 2 5 / M a r c h 2 0 X 0
1 5 : 0 1 : 4 6
| C o n t e n t s C o d e : P H A N T A S I A O
N L I N E v e r C 1 . 0 1 0 2
| A b a t o r N a m e : S H I N
| L o g i n P l a c e : B L U E P O L I S / C
E N T R A L C I R C L E / L O G I N B O X 0 7
| L o g i n S e q u e n c e : . . . . . c o m p l e t e
. . . . .
```

独特な浮遊感覚はスーツと消えていった。

両目を開けてみる。

正面には誰かが立っていた。目つきの悪い、ガリ痩せでヒョロリとした根暗男だ。

ただ、適当に短くしてある髪は黄金色だった。

不健康な色白肌も、東南アジア系の濃褐色になっている。

現実の俺との違いはそれだけ。

他はすべて、実像のままで。

「……………」

ああ、そうか。これ、鏡か。

俺はガリガリと頭をかいた。鏡の中の俺も、苦笑まじりにガリガリと頭をかいていた。

いや、それは俺であつて、俺ではない。

今の俺は久賀慎一くが しんいちではない。

“SHINシン”——それが今の俺。この外装アバターの名前なのだ。

10年前、国際的なIT企業グループ『NEUROニューロ』は、特殊な電磁波で人の神経系に干渉する技術——通称『PVピーブイ』を開発した。視覚や聴覚だけを騙す“不完全な仮想現実（False Virtuality）”とは異なる、“完全な仮想現実（Perfect Virtuality）”を可能としたのだ。

ただ、誰もが真つ先に思いつく娯楽利用は、諸々の事情から絶望視されていた。それでも関係者は努力を続け、昨年12月、ようやく娯楽用普及機の開発に成功した。こうして今年20X0年から様々なテストを行い、来年にはNEUROグループの完全子会社である『VRNバイアルエヌ』を通じて、普及機を一般販売すると宣言した。

世界に激震が走ったのは言うまでもない。

もっとも、その際に発表されたコンテンツというものが、単に仮想世界で観光を楽しむだけのものとか、仮想都市に住むだけのメタバース系コンテンツだとか……それもあつて、俺の興味は一気に失せてしまった。

そついうのが悪いというつもりはないが、単に“行く”だけの仮

想現実には旅行と変わらないと思うのだ。ゆえに興味がわかない。ということを、今年の正月、久しぶりに帰省した叔父に話した。たまたまTVニユースでPVのことが取り上げられ、おまえはどう思う、と尋ねられたからだが……

叔父はVRN社の社員だった。

寝耳に水だ。

しかも、公開されていないPVコンテンツに關係しているというのだから、なんだか笑うしかない。

コンテンツの名は『PHANTASIA ONLINE[®]』。
^{ワンド}魔杖と呼ばれる魔法的な道具を操る「^{ウイズ}魔杖師」たちの物語、という
バックストーリーを持った陣営対決メインのMMORPGだ。

公式設定によると――

遙か昔、神秘の結晶たる魔杖に支えられた偉大なる文明があった
だが悪しき魔杖師が現れたことで世界は滅亡の危機に瀕してしまう

ワンドウォー 魔杖戦争

輝ける十二英雄の時代にして偉大なる文明の黄昏たる時代

勝者は無く　ゆえに敗者も無く
文明は滅び　ゆえに争いも滅び

・
・
・

千年の時が流れた

世界は悪しき魔杖師が遺したクリーチャーたちが徘徊する秘境の地
と化していた

だが二つの月が重なりし時　異界に通じる三つの扉が開いた
《赤》の門は荒野に　《青》の門は海に　《緑》の門は森に

それは最後の英雄が遺した奇蹟

異界に生きる魔杖師たちの化身を召喚する究極の秘術

呼び出された彼らを待ち受けるものは何か

魔杖戦争に秘められた謎とは

今、魔杖師たちの謎に満ちた冒険が始まろうとしている——！

ありがちな異世界ファンタジーモノと思えば、間違いないらしい。
ゲームで最も重要な“陣営”の特色は——

《赤》の陣営——荒野・廃墟に中枢都市を持つ陣営。機械系の外装オプション有り。

《青》の陣営——海辺・群島に中枢都市を持つ陣営。爬虫類系の外装オプション有り。

《緑》の陣営——森林・山岳に中枢都市を持つ陣営。哺乳類系の外装オプション有り。

——となっている。

もつとも、陣営ごとのゲーム的な差は何もない。違いは、当面の主なフィールドの地形と外装の追加オプションだけだ。

ちなみにネットの情報を漁った限りでは、一番人気は猫耳や尻尾を追加できる《緑》、二番人気は躰のパーツを機械と換えられる《赤》、ゲテモノ系の《青》は圧倒的すぎるほど人気が無く、製品版では別のものに変えられるだろうと見られている。

さて。

俺は叔父のコネのおかげで、史上初のMMO仮想現実RPG『PHANTASIA ONLINE』のクロースドβテストになれたわけだが、なんでもうちの高校には、俺の他に、何らかの手段でテストになったヤツが何人かいるという話だ。

実際、テスターになったことを自慢げに語る連中が現れた。
そいつらはちょっとしたヒーローになっていたが、俺は黙っていた。

目立つのは嫌いなのだ。

いや、嫌いなのは人間全般……違うな。面倒なだけだ。人間関係
ってやつが。

だから俺は、誰にもテスターになったことを言わなかった。

普段通り、ボーッとしながら毎日をすごした。

そんな俺だから、陣営は《青》を選んだ。

理由は“人が一番少なさそうだから”。

それ以上でもそれ以下でもない。

外装オプションは最低ひとつ選ばなければならないので、俺は瞳孔が縦長になる“竜眼”^{ドラゴンアイ}を選んだ。そのせいで、俺の凶相がさらにパワーアップしたが、まあ、別にどうでもいい話だ。どうせ仮想現実^{バーチャル}なのだし。

「さて……」

俺は鏡で瞳孔を確かめたあと、改めてログインボックスの中を眺めてみた。

どこことなく電話ボックスを連想させる広さだ。

形状は円筒だが、鏡の部分だけ平らになっている。ドアは鏡の対面、つまり俺の背面にある。“OPEN”と書かれた自動ドアのタッチボタンのようなものを押すと、壁にしか見えないところがシュツといいながら左右に開いた。

外に出てみる。

（へえ……）

そこは半分ほど海に突き出している巨大な円形広場だった。

見上げると真夏の青空にまぶしい太陽が輝いている。太陽のある方角が南だとすると、その反対側にあたる北側には街並みが広がっていた。3車線ほどの幅がある道路沿いに、エーゲ海っぱさを感じさせる家々が建ち並び、その先に断崖絶壁をくりぬく形で、古代ギ

リシアを思わせる神殿があった。

全体的に東地中海のイメージでデザインが統一されている。

ちよつとした観光旅行に來た気分になさしてくれる光景でもある。

これはこれで、意外と悪くない。

「うわぁ……」

不意に傍らから声が響いた。

見ると隣のログインボックスから、同年代と思われる女性のテストアが外に出てきた。

身長は俺よりかなり低い。多分、150センチ台だろう。

癖のない金髪を腰まで伸ばし、東南アジア系を思わせる瑞々しい肌を太陽に晒している。

空を見上げる大振りな黒い双眸は、猫のように縦長の瞳孔で……

「……………」

俺は苦笑した。

まさか、俺と同じような色とオプションを選ぶテストアがいるとは。

それも芸能人並みの容姿を持つ女性外装で。

「あつ」

向こうも俺に気づいたようだ。俺のつま先から頭のとっぺんまで、マジマジと観察してから、丸くした目で俺を見上げてきた。

お互い、服装は初期装備のままだ。

上は無地の白いＴシャツ。下はゆったりとした膝丈のショートパンツと太い革ベルト。足はベルトで固定するタイプのサンダル。ちなみに下着はボクサーパンツで、倫理規定によって縁の部分が皮膚と癒着している。女性はこれに、スポーツブラが追加されるらしい。少なくともマニキュアルには、そう記載されている。

彼女は無言のまま苦笑した。

俺も無言のまま、ガリガリと頭をかいた。

「ひと」と彼女。「少ない……ですね」

俺はうなずきながら、彼女と一緒に周囲を見回した。

広場は限りなく無人に近い。

俺たちが出てきたログインボックスは、中央広場のちょうど中心に、円を描くようにして並んでいる。ログインしてきたテストターはこの周辺に止まっているままなのだが、ザッと見ても20名前後しかいないようだ。しかも、そのほとんどがトカゲ人間としか言いようがないテストターの集団だった。

外装オプションで種族を選んだ面々らしい。

この場では一番大きな集団であり、今は、互いの軀を見せ合っては、「うひょー！」とか「きたー！」とか叫んでいる。

正直、波長が合いそうにない。

「ちよつと……近づきづらいですね」

見ると彼女は例の集団を見ながら苦笑していた。

「確かに」

俺はそう応えた。

「あの……」と彼女。「闘技場コロセウムつて、どこにあるかわかりますか？」俺はちよつとだけ目を見開いた。

今日はこれというイベントが無い。NPCもセットされておらず、都市の外に出ることもできない。おまけに連続ログイン時間リミットタイムはたったの1時間。ログインを試す以上のことはできない日と断言している。

だが、頭を捻れば、やるべき事も簡単に見つかる。

例えば——トレーニング 戦闘訓練。

『PHANTASIA ONLINE』には多種多様な魔杖ワンドが用意されている。スタッフ・インタビューによると、それぞれの扱いに慣れるだけでも、最初はかなり手こずるという話だ。そこで『PHANTASIA ONLINE』では、戦闘訓練が可能コロセウムな場所として闘技場と呼ばれる場所が用意されている。

ただ。

「……戦闘の？」

思わず俺は、そう尋ね返していた。

一般的に、女性テスターは『PHANTASIA ONLINE』のゲーム以外のところ——NEUROが最初に告知したメタバース系コンテンツとしての魅力——に楽しみを抱いていると言われている。というか、このゲームの戦闘は、斬った撃ったの野蛮なものだ。そんなものに興味を持つ女性が、それもこんな可愛い子が

……

いや、ここは仮想現実だ。

俺のように実像に限りなく近い外装でログインする馬鹿、そういるはずもない。

「……………」

彼女は無言のまま、困ったように微笑みながら頷いてきた。

実像（中身）は違いかもしれないとわかっていても、男なら誰でも落ち着かなくさせるような、品のある微笑みだ。もっとも俺の場合、それが逆に気持ちを萎えさせたのだが。

「転移で……………」

一応、俺はそう答えながら、自分の左肩を軽く2度、叩いてみた。この動作を『ダブルタップ』と言う。叩く肩は、左右どちらでもかまわない。重要なのは“自分で自分の肩を2度叩く”ということになるだ。仮想世界では、こうすることでシステムウィンドウを展開できる……………らしい。

「おっ」と俺。

「あっ」と彼女。

ちょうど俺の胸の前に、斜めに傾いた藍色の板のような出現した。システムウィンドウが展開したのだ。

パッと見たところ、平面ディスプレイが何の支えも無しに浮かんでいるように見える。どうやら出現座標は胸を基準にしているらしく、身体を左右に揺すってみると、呼応するようにウィンドウも左右に揺れた。

なんとなく、美術の時間に使う画板に近い気もする。

「へえ……………」

俺は感心しながら、ウィンドウの上段に並ぶアイコンのひとつに触れてみた。

感触は液晶ディスプレイそのもの、操作感覚はタッチパネルそのままといった感じだ。

選んだアイコンは、都市内を移動する時に用いる“転移”を示したドアのアイコンだ。すると画面は切り替わり、転移可能なポイントを示しているらしい都市の略図が表示された。その中には、古代ローマの闘技場そのままのイラストもあった。転移ポイントであることを示す赤い光も点滅していた。

「お先」

俺はそう言い残し、コロセウム闘技場と思われるイラストにタッチ。“コロセ闘技場ウムに転移しますか？”という問いかけに“YES”と答えた。

#01-02

```
| Login Account : 436-332-200
4-9719
| FAL Check : . . . . OK
| Bit al Check : . . . . OK
| Login Check : . . . . OK
| Login Time : 29 / March 20X0
22:00:08
| Limit Time : 29 / March 20X0
23:00:08
| Contents Code : PHANTASIA O
NLINE ver C1.0102
| Abator Name : SHIN
| Login Place : BLUEPOLIS / C
LOSSUM / LOGIN BOX 01
| Login Sequence : . . . . .
. . . . . complete
```

ぼんやり待つこと十数分——俺は久賀慎一からSHIN^{シン}に変わっ
ていた。

「……………」

Tシャツの裾は外に出し、両手で金髪を軽くかき上げてみる。

本来は午前9時から可能になるはずのログインが、今日は調整の
関係で、午後10時にまでずれ込んでいた。そんなわけで、俺は初
めてタイマーログイン機能というものを使ってみたわけだが。

普通のログインと大した違いがない。

なんだかなあ、という感じがする。

「……よしっ」

俺はログインボックスを出た。

目の前には、断崖絶壁を背にした古代ローマの闘技場がそびえ建っていた。

蒼都コロサウムの闘技場だ。

周囲が針葉樹林で囲まれているため、どことなく、森の奥にある古代遺跡っぽい感じがあった。正門は南側にあり、その手前に広がる煉瓦敷きのスペース、南端にズラリとログインボックスが並んでいるところが、俺のいる正門広場になっていた。

ちなみに、向かって左側には煉瓦敷きの歩道が西にある針葉樹林へと伸びている。これを進み、針葉樹林を越え、小川にかかる石橋を越えれば市街地に入る——のだが、今現在、蒼都の東区は整備中のため入ることができない。

しかも初日に、どこかの浮かれたテスターたちが“大声で性器の名前を叫んでは転移して逃げる”という迷惑行為をやらかしたとかで、以後、都市内の転移機能が封印されることになっている。つまりまあ、俺は事実上、闘技場コリムに隔離されているわけだ。

もっとも、隔離されたのは俺だけじゃなかった。

——シュッ

背後から、ドアの開く音が聞こえてきた。

振り返ると、ログインボックスのひとつから、初日に会った女性テスターが出てきた。

彼女もまた、俺と一緒に隔離されたテスターだ。

名前はわからない。

だいたい、顔を見合わせたら会釈する程度の関係でしかない。今日もそうだ。

長い金髪をなびかせながらでてきた彼女は、俺に気づくと、どこかで見たことのあるような笑みを浮かべながら、上品に会釈してきた。

俺は顎を突き出すような会釈を返し、ガリガリと頭をかきながら、

コロセウム
闘技場へと入っていった。

向かう場所は、サッカーがやれそうなほど広い芝生のグラウンドだ。芝生を踏んだ俺は、ダブルタップでウィンドウを開いた。

上段に闘技場を模したアイコンが出現している。

タッチ。

切り替わった画面には“TRAINING”というボタンだけが出現した。

タッチ。

これでようやく戦闘訓練用のウィンドウが展開する。

『PHANTASIA ONLINE』の戦闘はFPS（一人称視点）のシューティングゲームとほとんど同じだ。それこそ、魔杖を銃だと思えば話が早い。

初期の魔杖は拳銃型の《スペルガン》。形状はガバメントと呼ばれる拳銃に良く似ているそうだが、軽さといい、反動の薄さといい、本物に比べると玩具としかいいようがないものらしい。

感覚的にはエアガンと似ているそうだ。俺は詳しくないので、よくわからないが。

「さて……」

俺は少し悩んでから、ガンタイプⅡパターンAの訓練を選択した。ウィンドウが消え、真正面に一枚のカードが出現した。

『PHANTASIA ONLINE』では様々なものがカードという形で表現されている。基本的に、装備品や消費財を表す『アイテムカード』、セットすることで追加能力を付与する『アビリティカード』、家屋の権利書などを意味する『エクストラカード』の3種類に分けられている。もちろん、今出現したカードは《スペルガン》が描かれたアイテムカードだ。

これを右の中指と人差し指とで挟みとった俺は、
「コール、オープンカード」

とつぶやいた。

カードがシュッと光の粒子に変わったかと思うと、右手が熱くな

った。

掌に丸いボールが押し当てられている感触がある。

俺はそれを握りしめた。

ボールはググツと独りでに大きくなり、急にニユルニユルとした手触りに変化。再び固さを取り戻すと、真っ白な拳銃の形になった。直後、カシャンという小さなSEが響き、拳銃を覆っていた白い殻は光の粒子と化して消えてしまった。

《スペルガン》が右手の中にあつた。

時間にして約3秒。戦闘中だと仮定すると、少し微妙な時間だ。使い方は初日のヘルプで確認済み。慣れない手つきで弾倉を外し、ちゃんと20発入っていることを確認する。まあ、本当は確認する必要も無いのだが。

——ポーン

トレーニング開始のSEが耳元で鳴り響いた。前を見ると、10メートル離れたところに巨大な丸い^ま的が出現していた。

半身になりながら、《スペルガン》を右手だけで構えてみる。

銃口から赤い光の線がまっすぐ伸びていた。

ガイドライン

射撃補助線だ。

驚くほど視認しやすいのは、システムの補正があるためらしい。たとえば真っ赤な場所で銃を構えても、射撃補助線はしっかりと見えるそうだ。

自分にも、敵にも。

(それが問題だよな)

射撃補助線は消すことができない。つまりPVP(プレイヤー対戦)では邪魔になるはずだ。おそらく、構えてから撃つまでを一瞬で終わられるかどうか、強い銃使いの条件のような気がする。

(まっ、今はそれ以前の問題か)

俺はそのまま20発、的に向かって撃つてみた。

パスッ、パスッというエアガンそのものな音が響いた。そのくせ、

銃口からはX字の青白いフラッシュノズルが瞬く。どうにもチグハグな感じがする。

全弾撃ち終わると、左斜め上に小さなウィンドウが出現した。

— point 1874 / RANK A

満点は2000点。ランクは1000点以下でE、以後は200点ごとにD、C、B、A。つまり、1800点以上だった今回はランクAだ。ネットの情報によると、1900点を超えるとSになり、ウィンドウのメニューの横に星印が付くらしい。それが何を意味しているのかは、今のところ不明なのだが。

「えっ!？」

不意に例の女性テストターの声が聞こえた。

俺が練習していた場所は、グランドの出入り口のすぐ右手だ。女性テストターは反対のすぐ左手で、同様に《スペルガン》の練習をしていた。もつとも、練習中の的は本人にしか見えないので、どのメニューを選んだのかは俺にもわからない。ウィンドウもそうだ。

他人のウィンドウは、透明な硝子板にしか見えず、表示内容を確認することができない。また、《青》ではウィンドウのデフォルトカラーが深い藍色だ。そのため俺からは、彼女のウィンドウが薄い空色の硝子板にしか見えなかった。

それはともかく。

「—— やったああああ!」

彼女は弾けるように跳び上がった。

「やった! やったやった! ほらほら、ランクS! ランクえー」

俺のほうに顔を向けたところで、彼女はハッとなり我に返った。

無言の俺。

固まる彼女。

俺は彼女から顔を背け、

「コール、リトライ」

とつぶやいた。

ヴォイスコマンドに応じて、再びガンタイプⅡパターンAのメニューが起動する。

今度はグリップの下に左手を添えながら20発、連続して撃ち込んだ。

ファンファールに似たSEが響く。

—— point 1949 / RANK S

よしっ。

視線を横に向けると、彼女は展開したウィンドウを操作しながら、チラチラと俺を盗み見ていた。

俺はすぐにガンタイプⅡパターンBのメニューを選んだ。今度は先ほどと同じ10メートルほど離れたところに、3×3に分かれた木枠が現れた。木枠の手前では、赤い文字で5秒からカウントダウンが始まっている。

今度は、枠の中に現れる標的を次々と撃っていくメニューだ。

俺は素早く弾倉が20発に戻ったことを確認した。

弾倉を戻すと同時に、右足を踏み出し、右手だけで構える。

カウントがゼロになった。

撃つ。

ひたすら、現れた^{まと}的を撃ち続ける。

ファンファールが鳴った。

すぐさまガンタイプⅡパターンCを選ぶ。

的は^{まと}変わらないが、今度は目の前に新しいカードが1枚現れた。

カートリッジカードだ。

手にとると、カウントダウンが始まった。

「コール、オープンカード」

左手の中に弾倉を具現化させる。

カウントダウンがゼロになった。

撃つ。今度もひたすら撃つ。と同時に、撃った弾数を数え続ける。

（——20！）

俺は即座に弾倉を外した。

空のカートリッジが芝生に落ちるより前に、新しいカートリッジを装填する。

ガチャツと初弾を装填。直後、俺は両手で構えながら残りの標的を撃ち続けた。

ファンファアレが鳴った。

パーフェクトだった。

「よしっ」

思わず左手で小さくガツポーズをする。

チラツと隣を見ると、新しいメニューを終わったばかりらしい彼女が、微妙に肩を落としつつ、チラツと俺のほうに目を向けてきた。俺はニヤツと笑いながら小さくつぶやいた。

「3つ」

途端、彼女はムツとした表情になった。

（勝った）

だがこれで満足する俺ではない。

すぐにパターンDに挑戦——が、今度は次々と起きあがりつつ接近してくる人型標的を撃つというメニューで、しかも点数計算がシビアだった。2度、3度と挑戦しても、ランクSどころかランクBにしかない。

「——3つ目え！」

彼女が叫んだ。見ると彼女は、ニヤツと笑っていた。

（追いつかれた！？）

しばらくして、俺はパターンDを攻略した。

「よし……」

「よしっ！」

彼女の声だ。ほぼ同時に攻略したらしい。

俺たちは一瞬だけにらみ合い——ほぼ同時に、パターンEを選択した。

——リミットタイムまで残り30秒

耳元でシステムメッセージが響いた。それでも俺は引き金を絞り続けた。彼女もそうだ。やめる気配をみせない。5分前、3分前、1分前の警告メッセージが響いた時もそうだった。まるで、先にやめたほうが負けになるような状況だった。

「ふう」

向こうが銃を降ろした。パターンFが終わったらしい。

残念がっているところを見るとランクSには届かなかったようだ。とはいえ、俺のほうもパターンFではランクBまでしか出せていない。今回のチャレンジも今ひとつだ。

「ランクは？」

彼女が尋ねてきた。チラッと視線を向けると、俺のことを睨んでいた。

無視して銃を撃ち続ける。

終わった。

—— P o i n t 1 7 6 9 / R a n k B

くそつ、まただ。

俺は銃を降ろし、ふう、と溜め息をついた。

——リミットタイムまで残り20秒

「ランクは？」

再び彼女が尋ねてきた。

「Bだよ。そっちは」

「……Cよ」

少し悔しげに言い返してきた。これには少しだけ驚かされた。

たとえ低くても、強がつて俺と同じか、上のランクを言ってくる
と思ったが……

「22時」

見ると彼女は、俺の方に身を向けながら鋭く睨んでいた。

「わたし、明日も22時にログインするわ」

——リミットタイムまで残り10秒……8、7、6

俺は、彼女に向き直った。

「……22時だな」

「そうよ」と彼女。

「逃げるなよ」

「どっちが」

——リミットタイムです。強制ログアウト処理に入ります。

こうして5月29日（テスト5日目）のテストは、デッド扱いの
強制ログアウトで幕を降ろした。

6月2日（テスト9日目）——まだ蒼都東区の立ち入り制限は解除されていない。転移機能は7日目の時点で完全削除されることが決まった。つまり俺たちは当分の間、コロセウム闘技場に隔離され続けることになったわけだ。

「遅い」

「悪い」

今日からリミットタイムが3時間になる。市街地ではNPCショップが開店し、家屋の売買も可能になった。

クリスタルを入手する手段はカジノぐらいしかないが、市街地では5月30日（テスト6日目）のカジノ祭りに続き、シヨップ祭りで賑わっているそうだ。

少なくとも、帰宅後に見たネットの情報ではそうなっていた。

「弁明は？」

並んで歩きながら、彼女が尋ねてきた。

「別に」

風呂上がりには晩酌中の親父につかまった——だなんて、言ったところで意味が無い。

そもそも、俺たちは友達でも何でも無い。

今だって並んで歩いているとはいえ、1メートル近く距離が離れている。

互いの顔を見たのも、俺がボックスを出た直後だけ。

会話も互いに正面をみながらやっている。

名前だって知らない。どちらも名乗っていないし、名前を聞こうとしてもいないからだ。俺のほうは、なんとなく聞いたら負けな気がして言わないし、聞かないでおこうと決めているだけだが。

「やるわよ」

「ああ」

グランドの中央に向かった俺たちは、背中合わせになった。

左肩をダブルタップ。

ウィンドウを開き、ガンタイプ最後のパターン、Hを選択する。

眼前に《スペルガン》カードが出現。これを手にとり、具現化させると、今度は展開したままになっているウィンドウに、拳銃型魔杖用カートリッジカードが10枚、ウィンドウに収納されたと表示された。

ガンタイプⅡパターンHは、実戦形式のタイムトライアルだ。

敵はブラックウーンズ。言ってしまうえば黒いスライムだ。

形状は“大人に黒いビニールシートを被せた”ものに近い。表皮はゼラチン状。一メートルぐらいまで近づくと、軀の一部が隆起する形で殴りかかってくる。これがけっこう痛い。少なくとも、軽く生身を叩かれた時と同じ痛みがある。“痛みを消すと暴力性に対するストッパーが無くなる”とかいう意見が採用された結果らしいが、正直、ゲームなんだから勘弁して欲しいというのが俺の意見だ。

パターンHでは、これが次から次と四方八方でウニウニと生まれ、ヌメヌメと近づき、かと思うとピヨンと左右にジャンプする。そんなブラックウーンズを、限られた弾数で、可能な限り多く倒すのがガンタイプⅡパターンHだ。

制限時間は3分。ぶっちゃけ、弾を使い切るだけでもひと苦労だが、100匹倒さなければランクSにならない。ブラックウーンズは2発から6発で倒れるので、理論的には不可能でもないのだが

……

「どうしたもんかなあ」

カウントダウンが始まったものの、俺は溜め息混じりでそうばやいていた。

「撃ちまくるしかないんじゃない？」

「ぼやきを聞いた彼女が背後から言い返してきた。」

「それ、やった」

「奇遇ね。わたしもよ」

カウントダウンがゼロになる。

「GO」

俺と彼女はほぼ同時に同じ台詞を口にしつつ、前方に向かって走り出した。

昨日の挑戦でわかったことは“近づいて撃ったほうが当たりやすい”という、あまりにも当たり前すぎる真理だった。だが、それを実行するには度胸がいる。いくらトレーニングなのでHPが削られることも、死ぬこともないとわかっていても……相手は又メ又メと動く不定形生物だ。おまけに殴られるとそこそこ痛い。

それでも、今のところこれ以外の攻略法が見つかっていない。

だからこそ――

「痛てっ！」

「きゃっ！」

「ぐぁ！」

「いたっ！」

俺と彼女は殴られ続けた。

挑戦開始から約1時間後――

「またかよ……」

息を切らせた俺は、大の字になって寝そべりながらスコアウィンドウを一瞥した。

―― Point 74 / Rank C

ランクSは遠そうだ。

「何体いった？」

時間切れした場所がたまたま近かったのだろっ、へとへとになった彼女がこっちに近づいてくる。かと思うと、両膝をつき、俺と同じようにゴロンと大の字に寝そべった。

「74。そっちは？」

「勝った。77」

「ベストは79」

「わたしだって」

つまり二人とも、80の壁を越えられずにいるらしい。

スコアウィンドウが消えた。

視界に映るのは、抜けるような夏の青空だけになった。

涼しい微風が吹き抜ける。

真夏の太陽がちりちりと肌を焼いた。その感覚も、どこことなく心地よかった。

「ねえ」と彼女。

「んっ？」と俺。

「名前は？」

「……そっちは？」

「そっちから言いなさいよ」

「レディファースト」

「可愛くないわね」

「可愛いなんて思われたくないね」

「リンよ」彼女が起きあがった。「L、I、NでL^{リン}IN。そっちは？」

「シン」

俺も上体を起こした。

「S、H、I、NでS^{シン}HIN」

互に見つめ合う。なんだか、初めて彼女の顔を真正面から見た気がする。

と、不意に彼女が笑った。

「なんだよ」

「うつん。そういえば今日まで名乗り合ってもいなかったんだあ
って」

「そりゃあ、別に友達でも何でもねーし」

俺は再び寝そべり、両腕を枕にしながら目を閉じた。

「友達か……」

彼女がボンヤリとつぶやく。

「……うん、確かに友達じゃないね、わたしたち。強いて言えば……
ライバル？」

「ふーん」

「なによ」

「別に」

「あんだね……通信簿で“協調性がありません”って書かれたくち
でしょ」

「まあ」

「やつぱりねえ。暗すぎよ、あんだ。もう、ドドメ色って感じ」

「悪かったな」

「悪いと思ってるの？」

「全然」

「喧嘩売ってる？」

「わりと」

なんて答えたものの、実はそうでもない。それ以前に、俺がこんなにも気楽に異性と話し合っていること事態、なにか間違っている気がした。

いや、もしかするとリンはネカマなのかもしれない。外装は実像をベースにしているが、調整を加えれば乳房を盛り上げらせることも、逆にへっこませることもできる。男女の違いは、性器か初期装備にスポーツブラが付いているかどうかでしか区別がつかないのだ。
「ひとつ聞いていい？」と彼女。

「ダメ」と俺。

「あんたの外装、どれくらいいいじってるの？」

「さあ」

「ほら、実像に近いほうが動きやすいって話もあるじゃない。あれって本当だと思う？」

「さあ」

「わたしがネカマだって言ったらどうする？」

「別に」

「本物の女だったら？」

「別に」

「張り合いないわね……」

彼女の溜め息が聞こえた。

俺も両目を閉じたまま、溜め息をついた。

「ったく……」

「なによ」

「いいから、俺のことは放っておいてくれ。頼むから。人付き合いとか、言葉の駆け引きとか、そういうの面倒でイヤなんだ。俺はリアルなゲームがやりたいからここに来てる。それ以外のことに興味無い。OK？」

「わたしもそうよ」

えっ？——と思って目をあけると、俺の右側で横座りになっている彼女が、黄金色の長い髪をかき上げているところだった。

一瞬、ドキツとした。

見惚れるところまでいかなかったのは、ここが作り物の世界だって認識が、頭の片隅にあったからこそだと思う。

「ちよつと街に出たら盛った男が群がってくるし、学校に行ったら学校に行ったで派閥争いとかなんだとかあるし……もうイヤ！ ああ、ストレスたまりまくりよ、もう！」

彼女はバサツと寝そべった。

俺は空を見上げた。

「愚痴かよ」

「愚痴よ。悪かったわね」

「別に」

俺は目を閉じ、ふう、と息を吐いた。

「あんたは？」と彼女。

「んっ？」と俺。

「だから……わたしはストレス解消のためのゲームだけど、あんたは？　なんで？」

「なんでって……」

少しだけ考えてみる。

「まあ……退屈だから、だな」

「暇つぶし？」

「いや、なんて言うか……退屈なんだよ、いろいろと」

それは嘘だ。勉強にしろ、運動にしろ、人付き合いにしろ、なんにしろ——本気になってやるべきことが、俺にはたくさん控えている。だが、どれにも本気になれない。面倒だという思いが先に来ってしまう。

しかし、ゲームだけは、苦労を苦労と思わずに済んでいる。

だから、俺はゲームをやる。

つまり——逃げていただけだ。いろいろなことから。

「ふーん……退屈なんだ……」

彼女が考え込むようにつぶやいた。

俺は応えなかった。

彼女もそのまま黙り込んだ。

風が吹き抜ける。

心地よい。

沈黙さえも、心地よく思える。

不思議な感覚だ。

人嫌いの俺が、あろうことか同世代っぽい女の子と一緒にいても平気にいる。気まずさはもちろんのこと、息苦しさも感じていない。そのうえ、どういっわけか彼女の質問にも真面目に答えてしまった。俺を知る人間なら「ありえない！」と叫んでるところだろう。

「……よしっ」

俺は両足をあげてから、ヒョイツと上体を起こした。

「そろそろやるか」

「OK」

彼女も立ち上がり、パンパンと躰についた埃を払った。

「念のために聞くけど、攻略方法、なにか見つけた？」

「カートリッジカードの呼び出しと具現。音声操作じゃなく、思考操作でやれば隙が大きく減る」

「うわっ……それってムズすぎない？」

「だろうな」

「あちゃあ……でも、確かにそれぐらいしかないもんね……あとは、バラまくようにするぐらい？」

「バラまく？」

「牽制よ、牽制。索敵とリロードの前に適当に撃ちまくるの」

「弾の減り、速いだろ」

「そりゃあね。でも、思考操作ができれば、問題無いんじゃない？」

「……だな」

こうして俺たちは、再びパターンHにチャレンジした。

結論を言えば、俺たちの選んだ方法は悪くなかったと思う。問題は思考操作が本当に難しいところ。黙唱するだけでもダメ。カードの呼び出し時には呼び出すカードそのものをイメージし、具現化する際には弾倉をイメージしないと反応してくれなかった。

それでも2時間もやれば、それなりにコツも掴めてくる。

先にパターンHをランクSでクリアしたのは彼女のほうだった。

「ほらあ、頑張れえ、若人お」

彼女の無気力な声援を受けながら、遅れること3挑戦後、俺もどうにかSをとった。

「じゃ、明日からグラップルタイプってことで」

「了解」

並んでログインボックスまで戻った俺たちは、リミットタイムの

10分前に、それぞれログアウトした。並んで歩く時の距離が近づいていたと気づいたのは、ログインボックスに入ってからのことだった。

6月3日（テスト10日目）——俺たちはグラップルタイプ「パターンAで苦戦していた。

「うわっ！」

彼女が転ぶ。だが必死な俺には、笑い飛ばす余裕もなかった。

「きつつ……」

俺はバランスをとるので精一杯だ。

グラップルタイプの魔杖は、鉄板を貼り付けたグローブの形をしている。名前は《アイアンナックル》だ。もはや魔杖とは言えない、通常攻撃であれば弾を消費することがないという便利な武器だが、その扱いは、難しいどころの話ではない。

いや、技を出すだけなら簡単だ。

例えば「コール、ワンド、アイアンナックル」と言えば、自分の視界内に照準が現れる。丸に十字が走った照準は視線に連動していて、攻撃可能な対象に重なると、その対象の輪郭と照準が太い赤へと変わる。その瞬間に技名——「ジャブ」とか「ストレート」とか「ハイキック」とか——を唱えれば、躰が勝手に動き、敵を殴るなり、蹴ったりしてくれる。もちろん、敵との間合いが攻撃に即した適したものであるならば、の話だが。

ところで。

格闘技で大切なものはなんだろうか？ 技だろうか？ いや、違う。

答えは“姿勢”だ。

ジャブを放つには、両脇をしつかりと締めている必要がある。

ハイキックの秘訣は軸足と上体の捻りにある。

ゆえにグラップルタイプを使いこなすには、正しい姿勢を覚えておく必要がある。

というわけで、グラップルタイプ「パターンAの課題は“姿勢の

矯正”そのものだった。やることは、ウィンドウに表示される矢印の方向に移動するだけ、というダンスゲームで足りないものだったが、ド素人のゲーマーにすぎない俺やリンには難しいどころの話ではなかった。

それ以前に、選べるスタイルがキックボクシングのみというのは、どうだろう？

他の格闘技は無視か？

それとも、βテストゆえの暫定的な処置か？

理解に苦しむところだ。

とにもかくにも。

「前……前……右……後ろ……右……左……前……後ろ……」

再挑戦したリンは、ぶつくさと言いながらステップを踏んでいた。なるほど、その手で行くのか。

「後ろ……左……左……前……右……前……後ろ……」

俺も真似をした。

移動に音声操作は適用されないもの、思考操作を明瞭化させる働きがあるのも事実。

「よしっ！」

さらに2度の挑戦で、俺が先にランクSをとった。

「ほれえ、頑張れえ、若人お」

「むかつくうううっ！」

俺の無気力な応援を受けたリンは、さらに4度の挑戦の後、ランクSをとった。

6月5日（テスト12日目）——俺たちはグラップルタイプ「パターンHをクリアした。

「ABCに比べれば楽よねえ」

とはリンの素朴な感想だ。

俺も同感だ。姿勢の矯正が強いられたパターンA、B、Cの3つは、洒落にならないほど辛いものだった。しかし、それなりに思考操作ができる俺たちだからこそ、そう思っただけのような気もする。なにしろ今回のパターンHも実践形式であり、ガンタイプ「パターンHで培った思考操作のコツがなければ、かなり苦戦したのは明白なのだ。

「次はソードか……」と俺。

「また矯正だったりして」とリン。

「勘弁しろよお」

矯正は無かったが、俺とリンは、姿勢を気にしながら戦うようになっていた。

6月6日（テスト13日目）——珍しくリンが遅刻したので、先にグランドに行き、グラップルタイプのパターンAからCの復習をしていた。ランクスを度外視すれば楽にクリアできるものの、やはり歩法や重心の置き方なんかで勉強になった。

「ごめん、帰るの遅くなっちゃって」

「いや」

自分にしか見えない目の前の敵の攻撃を避け続ける。

「グラップル？」

「C。復習を兼ねて」

「ふーん……わたしもちよつとやっていい？」

「今、何時だった？」

「10時半のちよつと前」

「だったら23時に挑戦開始」

「了解」

俺たちはグラップルタイプの復習をしてから、ソードタイプの攻略にかかった。

意外なくらい、楽にパターンHをクリアした。

これで全パターン、リンクSクリアした魔杖は3種になった。

「あとは槍と杖ね」

「杖ってなんだ？」

「先に試してみる？」

「いや、順番でいい。スピア、少し進めとく」

「了解」

スピアタイプはソードタイプとほとんど一緒だった。おかげで苦もなく進んだ。

「楽勝？」とリン。

「楽勝、楽勝」と俺。

6月7日（テスト14日目）——再びリンが遅刻したが、理由は聞かなかった。

「本当にごめん。今度、埋め合わせするから」

「期待しないで覚えとく。じゃ、さっさと槍、クリアすつか」

「了解」

案の定、スピアタイプは軽々と全クリアできた。
問題はそのあとのスタツフタイプだ。

「思考操作？」

「っばい」

スタツフタイプは“銃口と引き金の無いガンタイプ”というべき
魔杖だった。

操作方法は少し複雑だ。

グラップルタイプ、ソードタイプ、スピアタイプと同様、まず魔杖を起動するところから操作を開始する。起動すると、視界に照準が生まれる。基本的には魔法ごとに定められているコール・コマンドを発すると、魔法に応じた照準が生まれる。これを「セット」で固定し、それぞれの魔法ごとに定められているスタート・コマンドで魔法を起動する。音声操作で扱えばそれなりに楽だが、リンクSを狙うとなると、思考操作をメインにしなければならぬ。

なお、スタツフタイプにもカートリッジカードがある。ガンタイプとの違いは、カードを直接、魔杖に差し込むところだ。このあたりはガンタイプより優れているが、取り扱いの難しさは全タイプ中最大級だ。

「ライトアロー、セット、シューティグ」

しばらく音声操作で挑戦してみる。

パターンCまではどうにかなった。だが、パターンDからはつらくなった。

「シールドの使いどころだな……」

「光った瞬間じゃないの？」

「いや、それだと遅いだろ。こう……光りそうな瞬間？」

「種を割れ、と」

「……………」

「えっ？ 知らない？ ガンダムの古いやつ。『ガンダムSEED』」

「

「ぜんぜん」

「TVとか、あんまり見ないほう？」

「まあ……見ないな」

「つばいよねえ」

「悪かったな」

「はいはい、ひがむ前に攻略法よ、攻略法」

「だから、光りそうな瞬間だろ。こつ……動きが止まるっていつかさ」

それでもうまくいなかった。

クリアするだけなら簡単だが、ランクSへの道のりはまだまだ遠そうに思えた。

6月8日（テスト15日目）——ついに蒼都東区の構築が完了した。今日まで引つ張った理由は、そこに“舟で移動する水路だらけの都市”を作っていたためだ。スタッフ日記によると、ゴンドラと呼ばれる小舟をどう扱うで議論が紛糾したらしい。だが、さすがに半月が過ぎても閉鎖しているのは問題があるため、とりあえずは路線バスのように“定められた水路を予定通りに進んでいくNPCのゴンドラ”を配置することが決まった。これに伴い、閉鎖も解除されたそうだ。

「それにしたって……」

「ねえ……」

22時にタイマーログインした俺たちは、グランドの思わぬ光景に苦笑いを浮かべるしかなかった。

クローズドβテストターの総数は約六千名だ。このうち《青》の陣営に所属しているテストターは一割に満たない500と少しらしい。最大陣営は3000名を越える《緑》の陣営。次点が2500前後の《赤》の陣営。そのことは初日の段階から公開されていたが……だが。

「全員いるんじゃない？」とリン。

「半分だろ」と俺。

サッカー場と同程度の広さを持つ闘技場のグラウンドは、呆れるほど多くのテストターで埋め尽くされていたのだ。しかも、それぞれが思い思いに初めてのトレーニングに挑戦しているのだから、雑然とした感じが一層強まっていた。

見たところ、8割方がガンタイプに挑戦しているようだ。

残る2割はソードタイプとスピアタイプ。

スタッフタイプも数名いたが、音声操作で挑んでいた。

グラップルタイプは皆無。まあ、あれはネットでも“使えない魔杖タイプ”と言われているものだ。俺たちのような物好きでもないかぎり、パターンAの段階で挫折しているはずだ。

「それにしたって……」

リンは、最初にばやいた俺の言葉を真似ながら呆れかえった。

気持ちにはわかる。

人数やレベルの低さもそうだが、それ以上に呆れたのは、皆の外装についてだ。

過半数が、初日にも目撃したトカゲ人間だった。よく見れば、肌の色が濃緑色から黄緑色、藍色や紺色、真っ黒や真っ白など、いろいろなバリエーションがある。頭部の形もいろいろのようだ。鼻が無く、のっぺりと丸まっているように見える者もいれば、東洋の龍のように鼻と口が前に突き出している者もいる。耳が無い者、ヒレのようになっている者、長い尻尾を持つ者、尻尾が無い者……同じトカゲ人間でも、細部は千差万別なのだ。

さらに、全員が初期装備以外の服装を身につけている。

統一性の欠片も無い。

ある者は兜の無い西洋風の全身甲冑を身につけている。

ある者はタキシードっぽい衣装を身につけている。

俺たちのような人間の外装を使っているテスターは、そのほとんどが女性であり、メイド服やら、巫女装束やら、学生服やらを身につけている。

そんな集団が、真夏の青空の下、清々しい芝生の上で、銃や剣や槍を構えながら

「当たれえ！」

「うわあ！」

「ちえすとお！」

と叫んでいる光景。はつきり言って、シュールだ。

「……ねえ、シン」

「んっ？」

「次のログイン、人の少ない時間にしない？」

なるほど。確かにその手があった。

「ナイスだ。で、何時頃が少ない？」

「アイドンノー」

彼女は大げさに肩をすくめて見せた。

「ドウユー？」

「トウミー」

そもそも他人のログイン時間なんて、これまで一度も気にかけたことがないのだ。

人数情報のように、公式サイトに載っているなら話は別だが、気にしない情報を調べるはずもない。

「とりあえず……あれだな」

「あれって？」

「だから、これ」

俺は自分のTシャツを軽く摘んだ。それだけでリンは意図を理解してくれた。

「買い物？」

「この調子だと、逆に街のほう、無人だと思わないか？」

「なるほど。さすがシン。陰険なだけあって冴えてるじゃない」

「陰険言うな」

俺たちはグラウンドに背を向け、並んで闘技場^{コロセウム}を後にした。

針葉樹林の中を蛇行する歩道を進み、小川を抜けると、水路に突き出た小さな埠頭のような場所に出た。行き止まりか？——と思うまでもなく、ゆっくりと小振りな舟が一隻、埠頭に近づき、停泊した。

「へえ……」

リンが感心したとばかりに声をあげた。

この舟が例のゴンドラなんだろう。確かにTVで見たイタリアのゴンドラに良く似ている。だが、俺たちが感心したのは、舟尾に立つNPCのほうだ。考えてみると、これが俺とリンが会おう初めてのNPCといえる。

NPCは子供の木製マネキン人形だった。

顔には鼻しかなく、球体関節が剥き出しになっている。そんなマネキン人形が、いっぱしにズボンとシャツを着込み、麦わら帽子を頭に被って、自律的に動いている。それでいて不気味な印象が薄い。人形劇の世界に迷い込んだような微笑ましい感じさえある。

「このふねは“ちゅうおうがいくていりゅうじょ”までいきます。りょうきはむりょうです。おのりになりますか？」

頭部から響き出る声も、幼い男の子が台詞を棒読みしているような感じだ。

「時間はどれくらいかかるの？」

「ごふんです。とちゅうのていりゅうじょにはとまりません」

どうやら直行便らしい。

「このまま乗ればいいの？」

「はい」

「だつてさ」

リンが笑顔で振り返る。俺は苦笑と共に軽くうなずいた。

「お先っ」

間髪入れず、リンはゴンドラにピヨンと乗り込んだ。

「おちついて、ゆっくり、ごじょうせんください。ふねがゆれます。きけんです」

「ゴメン、ゴメン——ほら、シン。速く、速く」

「はいはい」

俺は舟が揺れないよう注意しながら乗り込んだ。

ゴンドラには2席ずつの椅子が5列並んでいた。リンは同乗者が誰もいないことをいいことに、椅子をまたぎ、船首の席に腰を下ろしている。俺が苦笑しつつ、適当なところに腰を下ろした。

「しゅっぱつまで、しょうしょうおまちください」

舟が出たのは、それから1分後のこと。

その間も、出発してからも、俺たちはどんな服を着るかということばかり話していた。

「絶対似合うって。シンって肩幅もけっこうあるじゃない」

「似合うかどうかより、動きやすさだろ」

「でもさあ、威圧感っていうのも重要なんじゃない？ PVPの時とか」

リンはしきりに黒スーツとサングラスを俺に薦めてきていた。

理由はわかる。

俺は凶相持ちだ。それに痩せたが、身長と肩幅は人並みにある。

これで黒スーツなんか着込んだ日には、誰がどう見ても、その筋の……

いや、そうはいつでも俺は16のガキだ。うまくいってもチンピラが関の山だろう。だとしたら、アロハシャツでも構わない気がする。実際に売っていきそうなので、あえて言わずにおくが。

「俺よりそっちだろ」

「わたし？」

「PVPも考慮に入れるとすれば、いろいろと考えられるだろ？」

「例えば？」

「全裸」

「却下」

「じゃあ、ビキニアーマー」

「大却下」

「お望みとあれば、PVPを前提にしたマニアックな提案、もっとしてやるぞ」

「……はいはい、そういうことね」

リンは溜め息をついた。

「わかったわよ。戦いやすさが第一、見た目は二の次。それでいいんでしょ？」

と言いつているうちに、ゆらりゆらりと進み出していたゴンドラは、中央通りに面した停留所に着いた。

舟を降り、さらに道を西へと進む。

白石の四角い家屋に挟まれた道を進むこと数分——俺たちは閑散とした目抜き通りに出た。右を見ると上り坂の彼方にギリシア風の神殿が、左を見ると海への伸びる石橋と、その先にある大きな円形広場が見えた。

「なんか、妙な感じ」とリン。

「……だな」

半月前、俺たちはあの広場で偶然出会った。あそこから見た街並みと神殿に感動して、すぐ闘技場コロセウムに移動し、ずっと二人つきりでトレーニングの完全制覇に挑み続けた。最初は1日1時間、しばらくして3時間ずつしか仮想現実世界で過ごしていないが……なぜか数年ぶりに“戻ってきた”という感じがある。本当に妙な感じだ。

「さてさて」

リンはパンツと両手を打ち鳴らしてから周囲を見回した。

「服屋さんは……あれ？」

リンが指したのは、店先に古代ローマのトーガを着込んだ本物のマネキンを置いている店だった。よく見れば軒下にTシャツを象った看板が下がっている。

「行けばわかるだろ」

「じゃ、早速」

ほとんどの《青》系テスターが“初めてのトレーニング”に勤しんでいる中、俺とリンは“初めての買い物”にチャレンジした。

6月10日（テスト17日目）——午前4時にログインした俺たちは、^{コロシアム}闘技場でスタツフタイプ^{II}パターンFに挑戦していた。進展状況はまずまずといったところだ。

ランクSには遠いものの、思考操作にも慣れ始めている。このままやり込めば、あと少しで思考操作を会得できるかもしれない。そんな実感が、俺たちをさらなる挑戦に駆り立てていた。さて。

なぜログイン時間を午前4時にしたかといえば——理由は『PHANTASIA ONLINE』における日数の数え方にある。そもそも『PHANTASIA ONLINE』は、1日の区切りを午前9時に置いている。メンテナンス時間が午前7時から午前9時、午後7時から午後9時の2時間ずつであるためだが、これにあわせてテスターたちも、昼組と夜組とに分かれ、それぞれのメンテ終了時間にタイマーログインするのが普通になりつつある。つまり夜で言えば、最も混雑する時間帯は21時から0時ということになる。

では0時にログインすれば誰もいないのか——といえば、そうとも言えない。

メンテ明けにログインしたテスターは、ログイン後、そこで得た情報や今日の感想をネットに書き込む場合が多い。『PHANT

ASIA ONLINE』はPVの娯楽利用に関するPRも兼ねているため、クローズドβテストでも、テスターが自由に情報を発信して良いとされているためだ。

これを確認してからログインする者も少なくない。午前1時から午前4時にログインする、俗に深夜組と言われるテスターたちだ。というわけで、俺たちは早朝組——午前4時から朝メンテ時間である午前7時までにログインする面々——になったというわけだ。実際にはPVベッドの起床機能——誘眠機能の逆で電磁波で神経系をゆつくりと活性化させる機能——で4時の10分前に目覚め、3時55分前にタイマーログインするという方法で、再び“誰もいない闘技場”^{コロセウム}を手にいれたのだ。

「でもさ」とリン。「なんで《青》^{うち}って、こんなに人がいないわけ？」

「知るかよ」

俺は休憩ということで、ゴロツと芝生に寝そべりながら答えた。

「まあ……追加オプションがゲテモノ系だからだろ」

「そういえば《緑》って多いもんね。ブログとか、サイトとかも」

「《赤》もけっこうあるぞ」

「『荒野の奇人』って、《赤》の人だっけ？」

「ガンタイプに詳しいところか？」

「そうそう。あと、『マトメ』の主要メンバー、ほとんど《赤》なんだでしょ？」

「いや、『マトメ』は落選組が多いだろ」

『マトメ』とは世界最大の匿名掲示板『Xちゃんねる』に書き込まれた『PHANTASIA ONLINE』関連の情報をまとめる『POSレまとめWIKI（仮）』のことだ。すでにテスターの間では、『マトメ』とカタカナで書けば通用するぐらい、有名な場所になっている。当然、俺も情報を集める時は、必ず最初にそこに目を通しているぐらいだ。

なお、落選組とは、クローズドβテスターの応募に落ちた人たち

のことであり、ネットではどちらかといえば、落選組がテストの書き込みから妄想を膨らませてワーワーと騒いでいる傾向が強い。

「そうなる……《青》の大手って……うーん、どこかなあ」

「『蜥蜴同盟』だろ？」

「あれかあ……」

『蜥蜴同盟』は《青》の3割にあたる150名ものテストが入する巨大な集団だ。母胎数が少ないため、逆に人数の集まりが良かったらしいのだ。確か《緑》で最大と言われる『猫耳少女団』でさえ、その半分くらいしか加入していないはずだから、どれだけ大きいかわかるうと言うもの。

もともと、氏族システムが未実装な現段階では、単にトカゲ人間のテストターが名を連ねているだけ、というものにすぎないのだが。「ログインする前にちよつと見てきたけど、服装とか揃えるっぽいよ？」

「揃える？」

「うん。濃紺の修道服みたい。あと、スケイルメールがどうか」

「修道服ねえ……」

足を伸ばし、両手を後ろについて座る俺は、自分の服を見下ろした。

「……まっ、人のことは言えないだろ」

「そうかな？」

「そうだろ？」

「そうかなあ？」

同じ格好で俺の右に座るリンも、自分の服装を見下ろした。

実は俺もリンも初期装備のままだ。

足はサンダル、下は膝丈のショートパンツ、上はTシャツ、下着はボクサーパンツ。リンはこれにスポーツブラが付く。汗ばんだ時、うつすらとそれが見えたので間違いない。つまり、こいつが真正銘の女であり……だからどうした、というわけでもないが。

「今時初期装備のままのテストター、俺たちぐらいだろ」

「うーん」

リンはまだ納得していないらしい。

「あのなあ」

俺は左肘で頭を支えつつ横向きになった。

「考えればわかるだろ。俺たちが全クリ目指してた最中、街のほうでカジノ祭りとか、シヨップ祭りとかあっただろ？ やることない連中が、それでも我慢して買い物を控えると思うか？」

「他の陣営だったら？」

「普通、祭りに参加してるだろ。俺みたいなキチガイ以外は」

「シンみたいって？」

「ゲームにしか興味ないヤツ」

バトルジャンキー
「戦鬪狂？」

「ジャンキーってほどじゃないが」俺は立ち上がった。「そろそろ再開するか」

「だね。汗も消えたし」

外装でも疲れたり、息が切れたり、汗をかいたりする。だが、しばらく休めば疲は消え、息も戻り、汗も嘘のように消える。そのあたりは、やっぱり仮想現実だ。汗のニオイもしないのだから、なんだか笑うしかない。

「よしっ——今日の目標、クリアじゃなくて完全思考操作だからな」
「わかってるって」

目標を達成できるまで、さらに2日かった。

6月15日（テスト22日目）——俺たちはとうとう、全メニューのランクスクリアを達成した。

「やったね」

「やったよ」

クタクタになった俺たちは、頭を付き合わせながら大の字になって寝そべっていた。

本当に疲れた。

今度もまた最後のパターンは実戦形式だった。ただ、魔法の使い分けが洒落にならないほど難しい。

直線的に光弾が飛ぶライトアロー。

着弾点で直径3メートルまで球状に炸裂するライトボール。

直径1メートルの青白い円形障壁を生み出すシールド。

この3つを使い分けつつ、魔法が切れたらカードで補充し、接近されたらグラップルタイプで鍛えた歩法で避け、スピアタイプで成らした杖捌きでいなし——それでもギリギリで100体倒せるかどうか、という際どいところだったのだ。

「でもまあ……これで、ハッキリしたな……」

「……なに？」

「メニューの並び」

「ああ、それ……同感」

ガンタイプで戦いそのものに慣れる。

グラップルタイプで動き方の基礎を学ぶ。

ソードタイプとスピアタイプで、段階的に長さの違う得物での戦い方を学ぶ。

そしてスタッフタイプで思考操作を身につける。

実によくできた並びだ。ただ、できることなら、最初からそうだと言っただけだった。いや、俺たちが“そういうものだ”とネット

に書き込めばいいだけなのだろう。そういえば情報提供って、一度もしたことないな……

「ねえ」とリン。

「んっ？」

「これからどうする？」

「これから？」

「フォールドの実装、まだでしょ？」

「ああ……」

次の目標か。

「そんなもん、決まってるだろ」

「なに？」

「鼻歌まじりで全クリできるようになるまで、やる」

「最初から？」

「ああ」

それが俺の練習方法だ。最近はまったくやっていないが、対戦格闘ゲームをやる時も、俺はひとつの目標を終えたら、同じ課題を繰り返すことが多いのだ。

「だいたい、全クリしたっていつても、パーフェクトじゃないだろ」

「パーフェクトって……そこまでやるの？」

「別にいいぞ。付き合わなくても」

俺は目を閉じた。

吹き抜ける潮風が実に心地いい。

（……これで終わりか）

ふと、そんなことを思った。

偶然と惰性で一緒にプレイしてきたが、それも今日までらしい。全クリなんて、俺にしてみれば通過点のひとつにすぎないが、今の話しぶりからすると、リンにとっては到達点なのだから、それも仕方ない。

（終わりか……）

どことなく、寂しい気がする。

この感覚は……そう、あれだ。ゲーム仲間と、縁が切れた時の感覚に似てる。

中学卒業と同時に、ヤツは遠くの高校に進学してしまった。

ネットを使えばいつでも対戦できたが、そこまでして遊ぶような間柄でもなかった。だから、そのまま縁が切れてしまった。多分だが、リンともそんな感じになる気がする。

そうか。リンと、これでお別れなのか……

「こら」

突然、ペシッと額を叩かれた。

ムツとしながら両目を開けると、逆さまになったリンの顔がヌツと出てきた。

「あんた、何様のつもり？」

リンは俺のことを睨んでいた。

テスト5日目のことが思い出された。互いの負けず嫌いに火がついたあの日のことだ。

あの時のリンも、今と同じように俺を睨んでいた。

違うのは距離と姿勢。

あの時は遠くにあったリンの顔が、今は手の届く場所にある。

おまけに長い金髪が数本、サラッと肩をすべり、俺の頬をくすぐっている。

「付き合わなくてもいい？ 冗談じゃないわよ。いつ、誰が、誰に付き合ったわけ？」

「……………」

「わたしはね、ずーっと、自分の意志で、全クリっていう目標を目指してただけよ。それともあんたは違うわけ？ わたしに付き合ってただけとか言うつもり？」

「……………」

「なんとか言いなさいよ」

「なんとか」

ペシッ。

「痛て」

だが、リンの手は俺に触れていない。

装備品を含む外装の周囲にはバリアーが張り巡らされている。痴漢行為などのハラスメント対策を兼ねた、絶対に解除できない厚さ1センチの見えない障壁があるのだ。

つまり。

「……………」

「……………」

俺の額とリンの手の間には、合計2センチの隙間がある。

絶対に埋めることのできない距離だ。

だが、衝撃は貫通する。

叩かれた感覚は、確かにあった。

俺は目を閉じた。

ペシッ。

リンが再び、俺の額を叩いた。

「寝るな」

「寝てねえよ」

「どうだか」

リンはくすくすと笑うと、

「そうだ」

と起きあがった。

「だったら今度は、ルール決めるわよ」

「ルール？」

「先にSクリしたほうがポイント獲得」

「ポイント制かよ」

「ポイント制よ」

俺は目を開き、ニヤツと笑った。

「のった」

「よしっ——あっ、どうせならパターンごとに替えるって、どう？」

Aは1点、Bは2点、順に増えていって、Hだけは10点。これ

だと逆転とかありそうじゃない？」

「無いな。どうせ俺が満点で、そっちが0点だ」

「そうね。決まってるわよね。わたしの勝利で」

「言ったな」

「言ったわよ」

俺たちは立ち上がり、そのまま横に並ぶようにして一方向を向いた。

「全クリ競争……」と俺。

「よい……」とリン。

「「スタートっ！」」

6月21日（テスト28日目）——俺は激しく落ち込んでいた。

「に、2点差……」

「あーっはははは」

土下座同然の姿勢で落胆している俺の目の前には、両手を腰にあてたリンが、わざとらしい高笑いをあげていた——と言えばわかる通り、全クリ競争は75対77で、俺が負けてしまった。

悔しい。

ちくしょう。

あのライトアローの照準を間違わなければ、間違いなく、ランクSが出ていたはずなのに。なぜ……なぜ最後の最後にランクAなんだ！ 99体なんて……まるで計ったように、99体で終わるだなんて！

「うーん。勝つって気持ちいいなあ」

「悪夢だ……」

「そういえば誰かさん、途中から“負けたらなんでも買ってやる”とか言ってたっけ？　そうそう。《パンツァーメイドレス》っていいよねえ。HPにプラス100パーセント？　もう、鬼に金棒？　メイドに《パンツァーメイドレス》？」

「お、鬼……」

2日前、様々なアイテムが新たに実装されている。中でも魔杖と防具は大幅に増え、俺たちも目の色をかえて情報をあさった。

《パンツァーメイドレス》は、その中でも話題を集めた超高級防具だ。なにしろミニスカートタイプのメイド服であるにも関わらず、身につけるだけでHPが2倍になるという馬鹿みたいなアイテムなのだ。

その分、値段も破格だ。

確か200万クリスタルだったはず。

この女は、それが欲しいと言っているのだ。もちろん、俺が買えないことを承知で。

「さあさあ、シン様。いかがなさいますか？」

「……煮るなり焼くなり、好きにしてくれ」

悔しいが、負けは負けだ。

本当に、本当に本当に本当に悔しいが……こればかりは仕方ない。

「じゃあ、メガトン級の貸しをひとつってことで」

「貸し？」

「そう、貸し。あとで必ず返してもらいます。そのつもりで」

あとでむしるってわけか。

「わかった……覚悟しとく」

「よしよし」

今日のリンは本当に楽しそうだ。そんなに俺に勝ったのがうれしいのだろうか？

「まっ、この話はこれくらいにして」

リンはその場に内股座りをした。

「これからのことなんだけど」

「もうひと勝負」

「そうじゃなくて——それより、いい加減、普通に座ったら？」

言われるまま、俺はその場にあぐらをかいた。

珍しくもリンと真正面から向き合う形になる。

「シン、今日の公式サイト、見てないでしょ？」

「んっ？ なにか出てたのか？」

「待ちに待ったものが」

俺は目を輝かせた。

「フィールドか？」

「イエース、ザツツライト」

リンは嬉しそうに笑った。

なるほど、それで上機嫌なのか。そういえば合流した時から浮かれていたし……

「……だったら最初から教えるよ。モチベーション、全然違ってたぞ」

「テストはログイン前、必ず公式サイトをチェックするべし」

「……………」

「文句は？」

「無い」

リンの言う通りだ。いくら姉貴の引越しなんかで時間がとられたといっても、公式サイトをチェックする時間くらい捻り出すのは難しくない。それこそ、起床機能で起きる時間を30分前にセットしておけば良かっただけでも言える。でもまあ、見てないものは見てないわけで。

「何時からだ？」

「明日。っていうか、今日」

何度も言うが、『PHANTASIA ONLINE』の1日は午前9時から始まる。さっきウィンドウを見た時に確認した実

在現実の時刻は午前6時10分頃だった。俺たちはあと40分ほどでリミットタイムが訪れるが、それは『PHANTASIA ONLINE』時間という6月21日分のリミットタイムにすぎない。今日22日のログイン時間は、午前9時からカウントされるのだ。

「それと、全リセットするんだって」

「……全部？」

「そう。外装から何から、ゼーんぶ。その代わりに、カードから何から、これまで止めていた機能、ゼーんぶ実装されるみたい」

「全部か……」

未実装で大きなところといったら、カードと氏族のふたつだ。このふたつに関する情報は皆無に等しいので、可能な限り早いうちに詳細を知りたいところだ。

「そこで相談」

リンが改まった。見ると正座になり、背筋を伸ばしている。
「んっ？」

俺は正座にはならなかったが、背筋を伸ばした。

「まずは陣営のこと。変えないよね？」

「なにを——ああ」

全リセットということは、登録作業からやり直すことになる。

「当たり前だろ。わざわざ人の多い場所に行く意味がわからん」

「じゃあ、次。外装は？」

「このまんま。変えるのも面倒だし」

「だから……全リセットなんだってば」

質問の意味がよくわからない。

「ほら。外装データ、バックアップとれないようになってるでしょ？ 面倒だっていうなら、実像のまんまってことになるでしょ？」

「いや、俺の変更点って、髪と肌の色ぐらいだし」

リンの目が見開かれた。

「そうなの？」

「そうだけど……」

そこでようやく、俺は意図を理解した。

「そっちは？」

「わたし？ わたしは……」

リンは頬を赤らめながら、言いづらそうに顔を逸らした。

まあ……そういうことなんだろう。

「別に時間がかかるなら、それでもいいけど。まさか何日もかかるとか？」

「そうじゃなくて……えっと……」

リンはうつむきながら、両手で顔を押さえた。

「……笑わない？」

「多分」

「多分じゃダメ。絶対、笑わない？」

「……誓う」

俺は右手をあげながら答えた。

「……よしっ」

リンは背筋を伸ばし、キリツとした表情で俺を見据えた。

俺も身構えた。

ここまでリンが固くなるのだ。「笑わない？」とか言ってきたいるが……下手をしたら、とんでもなく重い話が飛び出てくるかもしれない。体中に火傷の痕があるとか、実は不治の病で寝たきりだとか。そうだとしたら、平然とした対応をするのが筋つてものだと思う。もしかすると違うかもしれないが、とにかくにも、俺は眉ひとつ動かさないよう、表情を引き締めることにした。

リンが口を開いた。

「わたし……ね」

「……」

「実は……」

「……」

「胸……小さいのよ……」

「……ぶっ」

——ドガッ！

リンの右ストレートが俺の顔面に炸裂した。痛い。

「笑うな！」

「悪い」

俺は鼻がしらをさすりながら、できるだけ表情を引き締めることにした。

でも、笑いがこみ上げてくる。

なんだ、そういうことか。良かった。あつ、いや、当人がこれほど過剰反応しているんだ。つまり胸の小ささはコンプレックスであつて、それがどんなものであるうとも笑われるとなると傷つくはずだ。うん、そうそう。コンプレックスを笑うだなんて、男として、人として間違つて——

「だから笑うなつて言つてるでしょ！」

再び右ストレート。今度は右手でしっかりと受け止めた。

「悪い」

でも、頬のゆるみがなかなか治らなかった。

「でもな……こっちは最悪の可能性、想定してたんだぞ」

「最悪つてなによ」

「体中に火傷の痕があるとか、実は不治の病だとか」

「……悪かったわね。大したことなくて」

「いや、俺もこの顔にコンプレックスあるし」
「その顔に？」

リンは少しばかり驚きつつ尋ね返してきた。

「顔っていうか……目だな」

俺は苦笑した。

「黙ってても睨^{オウ}んでる感じするだろ？ だから実在^{オウ}現実だと伊達眼鏡なんかかけて、誤魔化してるわけよ」

「へえ……苦労してんだ」

「苦労つてもんでもないだろ。でもまあ……なるほど……違うわけか……」

俺はリンの胸元をジッと見つめた。

リンは慌てて、身を捻らせながら両手で胸を隠した。

「なによ」

「別に」

これまで意識していなかったが、確かに外装の胸は大きめだ。もつとも、無駄に胸のでかい姉貴を見て育った俺だ。そりゃあ、中学に入った直後あたりは、思うところも無かったわけではないが……まあ、中3の頃には、気にもならなくなった。

「なによ」

「いや……剣の時、だったな。ボヨンボヨンはね回って、動きづらそうだなあって」

「……………」

「変なデッドウェイト残すぐらいなら、小さいほうが戦いやすいんじゃないか？」

「あんたねえ」

リンは溜め息をついた。

溜め息の意味が掴めず、俺は頭上に疑問符を浮かべた。

そんな俺の反応にも、彼女は再び溜め息をついた。

「ホント、脳味噌の99パーセントがゲームのためしか動いてないわけね、あんたは」

「失敬だな。いつでも80パーセントだろ」

——リミットタイムまで残り5分です

警告メッセージが耳元で響いた。

「残り5分」

俺は立ち上がった。

「もう？——あつ、わたしも」

数瞬遅れでリンにも警告が来たらしい。彼女も立ち上がり、一緒に外へと歩き出した。

「じゃ、あとは明日か？」

「それなんだけど……わたし、ちよつとおばあちゃんの家で1泊しなきゃいけないのよ」

「1泊？」

「昼に出て、明日の夜に戻るの。だから定時は無理」

ちなみに俺たちの定時は、午前3時50分から午前6時50分だ。

「でも、わたしとしてはやってみたいわけよ。フィールドでの戦い。1秒でも早く」

「出発、何時だ？」

「午後の1時。いろいろあるから11時には仕度、始めるけど……」

リンはチラッと俺の横顔を盗み見てきた。

なるほど、そういうことか。女の心はまったくわからんが、ゲー

マーの心理なら簡単に理解できる。

「だったら、メンテ明けから2時間だけいってみるか？」

「いいの！？」

リンの表情が輝いた。

「いいも悪いも……抜け駆けしたら、あとで殴るだろ。俺のこと」

「当然じゃない」

「だろうと思った」

「じゃあさ、細かい打ち合わせは、外に出てからってことで」

「外？」

「電話かメールかヴォイスチャット。メンテ明けまでの2時間のう

ちに、情報、集めるだけ集めて対策練るべきでしょ？」

「んじゃ、ヴォイスチャット。俺のアドレス、暗記できるか？」
「もちろん」

俺の告げたアドレスを、リンはスラスラと復唱してみせた。

独特の浮遊感と共に世界が暗闇に閉ざされていった。
何かが背中に押し当てられる。

いや、俺が何かに背中を押し当てている。

—— Logout Sequence : complete
合成音声と共にかすかなモーター音が聞こえてきた。

両目を開けてみる。

まるでワニが口を開けるように、腰のあたりまで覆い被さつていた黒いフードが、ゆっくりと独りでに開いていった。完全に上がりきると、少し汚れた乳白色の天井が見えた。部屋はほのかに明るい。カーテン越しにまぶしい朝日が差し込んでる。

俺は軽く背伸びをしながらベッドから降りた。

正式名称『 P V D - B O O 1 P 』。

通称『 P V ベッド 』。

見た目は、ワニの口のように開閉する半円筒のフードが付いた、シングルサイズのウォーターベッドにすぎない。だが、これでも1台100万以上するらしい。値段を聞いた時にはビビったものだが、試作品のモニターを兼ねているため、たとえ壊しても支払いは発生しないと聞いて安心したものだ。それでも当初は、札束の上に寝ている気がして、妙に落ち着かなかったことを覚えている。まあ、所

詮は庶民の小せがれつてところなのだろう。

なお、P Vベッドには専用の枕、毛布、掛け布団、枕カバー、シート、布団カバーがセットになっている。金属製品さえなければ通常の布団も使えるそうだが、俺は万が一にそなえ、付属品だけを使っている。つまり、フードさえ度外視すれば、見た目も使い方も普通のベッドと変わらないということだ。

（それにしても……）

俺は閑散とした九畳間を眺めだした。

昨日、姉貴が家（分譲マンション）を出て行った——といっても、暗い話ではない。むしろめでたい話だ。なにしろ4年も付き合った高塚さんと、ようやくゴールインしたのだ。

本当に……惜しい人をなくした。

高塚さんには心からの敬意と弔意を捧げたい。合掌。
ではなく。

そういう次第で、俺はこれまで姉貴が占拠していた9畳間を手に入れた。4畳半の和室から、とうとう抜け出したのだ。とはいっても、昨日は姉貴の荷物を運び出すだけで精一杯だった。引っ越しを手伝ってくれた姉貴の後輩の方々にお願いして、重い荷物だけは運び込んだが……はてさて、どうしたものか。

「……………」

いや、部屋の片づけはあと回しだ。

本棚を外した学習机に向かった。そこには1世代前のノートパソコンが置いてある。

笑いたければ笑え。

俺は次世代情報端末であるP Vベッドを、旧型のノートパソコンを経由してQライン（超高速量子暗号回線）につなげているのだ。一応、通信カードとルーターは叔父の好意で新しく買い換えているが……正直、外装の調整なんていう激重な処理をやらせるパワーは無い。俺が途中で外装調整を投げ出した最大の理由が、それだったりする。

「新しいヤツ、欲しいよなあ」

そんなことをぼやきながら、俺は椅子に座り、ノートパソコンを開いた。

最大化しているPVモニタを最小化。続けてIPヴォイスチャット用フリーソフト『SCOP3』を起動。携帯電話充電器の横に投げおかれたインカムを装着、端子を差し込む。と、計ったようなタイミングでSCOP3がアドレスコールを受けたというウィンドウを表示した。接続者のHNは“ハンドルネームLIN”だ。

受話ボタンをクリック。

もしもし、シン？

聞こえてきたのは、仮想現実と全く同じリンの声だった。

「おっす」

答えると、リンは一瞬沈黙した。

「もしもし？」

あつ、うつん。聞こえる、聞こえる。ちょっと驚いただけ

「なにを？」

別に。それより、まず公式サイト。開ける？

「ちよい待った」

タブブラウザを起動。ブックマークしてある『PHANTASIA ONLINE』公式サイトを開く。Flashの進化系にあたるF2で制御されたオープンングムービーは速効でスキップ。記録済みのアカウントで会員登録を済ませ、ようやく求めている公式サイトの情報ページに到着する。

「OK、着いた」

だったら最初に――

そこから俺たちは、ヴォイスチャットで話し合いながらいろいろなサイトを巡り、情報を集めまくった。もつとも、俺たちが求めるフィールドや戦闘に関する情報は驚くほど少なく、そのほとんどが新たに追加される外装オプションに関するものだった。

情報無いね……

「これからの話だからなあ」

それでもわかったことがいくつかある。

まず、解放される最初のフィールドは“試練場”と呼ばれる全五階層の地下迷宮らしい。各都市の神殿にいるNPC大神官に語りかけることで、《赤》の陣営なら“赤の試練場”に、《青》の陣営なら“青の試練場”に、《緑》の陣営なら“緑の試練場”に、それぞれ強制転移されるそうだ。

転移先は“シュートボックス”という、デッド時の復活場所にならないログインボックス。同時参加人数は最大256人まで。デッド以外の方法では最下層にいるボスクリーチャーを倒し、クリアするまで脱出ができない。

これが初フィールドに関連した情報の全てだった。

「どうする？ クリア時間の目安、2時間ってことになってるぞ？」

うーん……

今回はリンの都合で2時間しかログインできない。時間が来たら、デッド扱いになるフィールド・ログアウトで抜ければいいだけの話だ。しかし、できることならクリアしたうえで脱出したいところだ。

「やってやれないこと、無いだろ」

そう……かな？

「普通のプレイヤーで2時間だろ？ こっちはSラン全クリ（ランクスで全クリア）、2周してんだ。やり方次第で、なんとでもなる」

……うん、確かに

「だろ？」

だね

「だったら——」

俺たちはさらに、作戦を練りだすのだった。

0 1 - 0 8

あつという間に時間が過ぎた。

8 時 3 0 分を過ぎたところで、外装登録が可能になった。俺たちは作戦会議を続けながら外装を再調整。髪を金髪、肌を濃褐色、さらに話の流れから瞳を金色にしたうえで、外装オプションの“竜眼”を選んだ。

こっちは O K。そっちは？

「完了。じゃ、向こうで」

了解

ボイスチャットを終えた俺は、大急ぎでトイレに向かった。実はけっこう、我慢していたのだ。ちなみに親父は出勤済み、母さんは昨日から高槻さんの実家にお泊まり中。そんなわけで、俺は冷たくなっていた昨夜のピザを手早く牛乳で胃に流し込み、部屋に駆け戻った。

不思議と体中に気合いがみなぎっている。

「よしっ、やるか！」

気合い一声。P V ベッドに横たわり、枕元のエントリーボタンを押し込んだ。

```
| | L o g i n   A c c o u n t   :   4 3 6 - 3 3 2 - 2 0 0
| | 4 - 9 7 1 9
| | F A L   C h e c k   :   . . . . . O K
| | B i t a l   C h e c k   :   . . . . . O K
| | L o g i n   C h e c k   :   . . . . . O K
| | L o g i n   T i m e   :   2 2 / J u n e   2 0 X 0   0
| | 9 : 0 0 : 0 2
| | L i m i t   T i m e   :   2 2 / J u n e   2 0 X 0   1
```

2:00:02
| Contents Code : PHANTASIA O
| NLINE ver C1.0102
| Abator Name : SHIN
| Login Place : BLUEPOLIS / C
| ENTRAL CIRCLE / LOGIN BOX 24
| Login Sequence :
... complete

浮遊感が消え、足がしっかりと地面を踏みしめた——と実感するなり、俺は振り返り、すぐさまドアのオープンボタンを叩いた。外に出ると、そこは初日しか来たことがない海上にある蒼都の中央広場だった。

（リンは——？）

他のエントリーボックスからも、初期装備のテスターがぞろぞろと出てきていた。

圧倒的にトカゲ人間と美少女が多い。

というか「おまえら小学生だろ」と言いたいぐらい幼い女の子がたくさんいた。

一瞬、イヤな予感が脳裏をよぎった。

いや、今はそれどころじゃない。

「シiiiiin！」

20メートル先に、後ろに手を振りつつ走っている女性テスターがいた。

リンだ。

速度を緩めたのか、しばらくすると俺もすぐに追いついた。

「遅い！」

「どこが！」

俺たちはそのままジョギングでもしているかのようなピッチで走

り続けた。

中央街区に入る。

「大神殿で！」とリン。

「買い忘れるなよ！」と俺。

俺たちはそれぞれ、別の店に飛び込んだ。

『マトメ』にあった略図の通り、俺の飛び込んだ先は魔杖屋だった。

「いらっしやいま——」

「《ホーリーバンテージ》2つ！ スペルガンのカートリッジ20枚！」

アラビア商人っぽい扮装をした子供の木製マネキン人形（NPC店員）は、ゆっくりとした動作でカードを出してきた。イライラしながら眼前に現れた精算ウィンドウのOKをタッチ。全カードが自動的に、俺のカードウィンドウに収納された。

「よしっ」

すかさず店を飛び出す。

次は薬屋に飛び込み、《ミドルキュア》カードを4枚、《スモールキュア》カードを20枚購入する。それを終えたら、あとは神殿まで一直線。神殿前に人影が無かったため、少し速度を落としながら振り返ってみる。

いた。

ちようど数ある服屋のひとつから出てきたところだ。

手を挙げると、リンも手を挙げ返しながら走り寄ってきた。すでに1クリスタルの《ヘアゴム》で、長い金髪をポニーテールに束ね上げていた。

「どうだった？」

「歩きながら交換。の前に、パーティ登録」

「了解」

俺たちは並んで歩きながら、打ち合わせ通りに動いていた。

パーティはこのゲームで一番小さなグループ単位だ。構成人数は

最大6名。メリットはステータス情報の共有、パーティ共有カードウィンドウの利用、パーティ対象のカードの効果対象になる、の3点。

パーティの結成方法は至って簡単。

「コール、パーティメイク。リン」

俺はそう言いながらリンの肩に軽く手を置いた。バリアーがあるので直接触れあわないが、固いくせにウネウネと動くゴムのような触感が右の掌に感じられた。

一方、リンの眼前にはウィンドウが展開している。

リンはウィンドウにタッチした。

俺の眼前にウィンドウが展開する。

——【LINE】がパーティに加わりました。

これで終了だ。

脱退は本人がウィンドウで操作するか、パーティの3分の1の端数切り上げ人が、脱退要請を行うだけで良い。つまり俺たちの場合、互いが自由に、いつでも相手と縁切りできるというわけだ。

「半分ずつよね？」

「いや、俺の分はもうとってるから、全部もってけ」

「了解。わたしのも、そうするね」

「了解」

共有ウィンドウのカードは、一端、ウィンドウ操作で個人のカードウィンドウに収納しないと呼び出すことができない。それを踏まえ、俺は購入したカードの半分を共有ウィンドウに移した。それはすぐに消え去り、変わって別のカードが共有ウィンドウに現れた。

これを自分のカードウィンドウに移動。

最後にウィンドウ内で装備を指示する。

全身がザワツときた。

次の瞬間、俺の服装は別のものに変わっていた。

足は焦茶色をしたミドルのトレッキングシューズ、下は袴、腰にはガンベルト、右腰に《スペルガン》、左腰にカードホルダー、上

はTシャツのまま、しかし両腕には白い《ホーリーバンテージ》が巻き付いている。

見るとリンも全く同じ格好になっていた。

「……………」

「……………」

お互い、つい黙り込んでしまう。

それというのも――装備を変えた瞬間、俺たちは一瞬だけ下着姿になってしまったのだ。まだ周囲に誰もいないのが不幸中の幸いだ。だが、それでも微妙に気まずいものは気まずいわけで。

「あつ……………」と俺。

「な、なに？」とリン。

「いや……………」

俺は彼女の胸元を見た。

「……………しぼんだな」

飛んできた左ジャブを、俺はスウェーでどうにかかわした。

NPC大神官は、神殿の階段を登ってすぐのところにいる。普段は奥の祭壇にいるようだが、今日ばかりは特別に出てきたらしい。

「いかいよりおとずれたものよ。なんじらがしんの《あお》のまじようしであることあかしをもとめるなら、これよりなんじらを“あおのしれんじよう”におくりとどけよう」

店員もそうだったが、NPCの口調は相も変わらず“子供の朗読”だった。

これがまた、ひどく聞き取りづらい。

できることなら、どうにかして欲しいところだ。

——ポーン

聞き慣れたSEと共に俺の前にウィンドウが出てきた。

「あつ——」とリン。

「んっ？」と俺。

「読める。シンのウィンドウ」

「……へえ」

どうやらパーティを組むと、メンバーのウィンドウが閲覧可能になるようだ。

だったら——

「操作もできるってことか？」

「やってみていい？」

俺が頷くと、リンは“青の試練場に転移しますか？”の下に表示されている“YES”に触れた。だが、さすがに反応しない。苦笑するリンに変わって、俺がYESボタンにタッチした。

世界が暗転し、あの浮遊感覚が襲いかかってきた。

次の瞬間、俺は見慣れたログインボックスの中に立っていた。

振り返り、ドアを開ける。

ボックスの外は焦茶色の煉瓦で作られた広い部屋の中だった。窓はひとつもなく、天井が蛍光塗料でも塗っているかのように、ボンヤリと橙色の光を放っていた。

「シン」

顔を向けると、リンが《スペルガン》を抜いていた。

「本番よーい」

「すたーと」

俺も《スペルガン》を抜きつつ、遠くにある唯一のドアに向かって歩き出した。

ドアは、あと5メートルほどの距離に近づくと、自動的にフツと消えた。

ドアの奥には、部屋と同じ煉瓦作りの通路がまっすぐ続いている。

ついでに通路の先に、戦い慣れたブラックウーンズが4体、うごめいていた。

「初陣もおまえらか……」

「予想通りってことで」

「だな」

俺たちは普通の速さで歩きつつ、《スペルガン》で4体とも手早く倒した。

——ポーン

SEが聞こえた。

「なに、今の？」

どうやらリンにも聞こえたらしい。

「……アイテムじゃないか？」

歩きながらウィンドウを開き、共有ウィンドウを確かめてみる。

案の定、空っぽだったはずのそこには、スモールキュアカード1枚と4クリスタルが収納されていた。

「うわぁ……100匹倒してもたったの100？」

「雑魚だからな」

「だねえ」

そのまま歩くと、十字路にぶちあった。

「左手？」とリン。

「法則」と俺。

俺たちは左に曲がった。

出てくるブラックウーンズを次々と倒した俺たちは、下へと続く

螺旋階段を見つけた。部屋の中央にポツンと存在する、鉄製の螺旋階段だ。

「ここまで30分か……」

「でも、買い物とか差し引いたら20分くらいでしょ？」

確かにその通りだが、予想以上に、この迷宮は広いのかもしれない。

「ペース、あげるぞ」

「了解」

地下2階に下りると、ブラックウーンズとの遭遇回数が増えた。

しかも一度に出てくる数は最低でも10体だ。6人パーティを想定しての配置だろう。もっとも、俺たちにしてみれば、必ず向かう先から固まって出現するブラックウーンズなど、大した障害にならなかった。

それよりも問題は――

「弾、どうする？」

「温存」

「了解」

ブラックウーンズは、稀にカードを落としてくれる。だが、そのほとんどは《スモールキュア》なのだ。カートリッジ系カードは一枚も落としてくれない。これでは、いずれ弾切れになるのは目に見えていた。

そういうわけで。

「はっ！」

「やっ！」

俺たちは素手で戦いだした。そのための《ホーリーバンテージ》だ。とはいっても、こんな攻略方法、スタッフも想定していなかったと思う。そもそも、徹底的にトレーニングをやりこんだプレイヤーが現れるとは考えていなかっただろう。

「なんか、いい調子？」

リンが笑顔で尋ねてきた。

「でも時間が辛い」

「——うわっ、ホント」

俺たちは走り出した。やはり思った以上に時間がかかっていた。

地下3階に入ると新しい敵が現れた。スタッフタイプのトレーニングに登場した、光弾を放つ黒真珠を埋め込んだウーンズ——ガンウーンズだ。

しかし。

「甘い甘い甘ああああい！」

こっちは飽きるほどガンウーンズとも戦っている。光弾を放つタイミングも把握済みだ。

「リン！ 無理して急ぐぞ！」

「了解！」

俺たちはもはやクリーチャーのことなど二の次にしていた。すでに時刻は10時15分をすぎている。

俺たちに残された時間は、残りわずか45分なのだ。

「——リン、時間は!？」

「10時43分」

俺たちは螺旋階段の前で呼吸を整えていた。

これで地下四階も終わりだ。残すところは、この階段の下にある地下五階のみ。問題は、俺たちに残されている時間が17分しかないことだ。予想以上に時間が掛かりすぎた。

「決めた」

まだ汗だくのリンが背筋を伸ばした。

「クリアするまでやる」

「おい……」

「だったら聞くけど」

リンは俺を睨んだ。

「あんただったらどう？ 途中でリタイアして、後悔しない？」

「……たく」

俺も背筋を伸ばし、両手で髪をかきあげた。

「だったら、こうだ。5階に下りたらずっと全力疾走。敵に会ったら、止まったうえで銃で応戦。その間に呼吸を整える。で、倒したら出発。敵が多すぎたら、ダメージ無視でとにかく特攻。俺が特攻つていたら特攻だ。それでどうだ」

「素敵じゃない。神風攻略？」

リンは満面の笑みを浮かべた。

「そういうこつた」

自然と俺の顔にも笑みが浮かんた。

「よしっ……行くぞ！」

「了解！」

俺たちは気合いを入れて螺旋階段を飛ぶように降りた。
地下5階——試練場の最下層に到着。

すぐさま、俺たちは競い合うように全力で走り出した。

向かう先に誰かがいた。

いや、違う。

NPCと同じ木製マネキン人形だ。それも全体が黒っぽく、服を

身につけていない。おまけに、それぞれが手に拳銃や剣や杖を持っていた。

「応戦！」

ザザザツと足を滑らせながら、中腰になった俺は《スペルガン》を両手で構えた。

「どれから！？」

答える代わりに杖持ちを狙った。

少し前方で静止したリンも、立ったまましつかりと両手で《スペルガン》を構え、杖持ちに向かって引き金を絞った。

——ピッ

視界に見たこともないものが表示された。

他の杖持ちから自分へと伸びる弧を描いた赤い線だ。しかも、俺を包み込むように、赤い光線で作られたポリゴンのドームが出現していた。

（——ライトボール！）

俺は前に向かって転がり込んだ。

直後、赤い線をたどりながら白い光弾がギョーンと飛んできた。

光弾が着弾。炸裂。

——ドンッ！

SEと共に熱風が感じられた。ライトボールの特殊効果だ。

「シン！？」

驚いたリンがこっちに顔を向ける——が、その頬から、直線的な赤い線が伸びていた。

「よける！」

跳ね起きながら、リンの脇腹を押しやる。

——ヒュン！

銃弾が飛び抜けていった。間一髪だった。

だが、無性に腹が立った。

頭に来た。

「……………」

思考がクリアになっていく。

俺は前傾姿勢で走り出しながら、《スペルガン》を敵の銃持ちに向かつて撃ちまくった。

赤い光線が俺に集まろうとする。

この線はあそこの、その線はあっちの、そっちの線のあの敵のやつだ。

しっかりと連中の動きを見る。

線のひとつが俺に重なった。そいつの引き金にかけた指が動いた。左に跳ぶ。

銃弾が腹の右横を飛び抜ける。

別の線が重なる。

軀を右に傾ける。

銃弾が左頬の横を飛び抜ける。

3本目の線が迫る。同時にSEを耳にする。杖持ちにロックオンされた音だ。出現した赤線は直線。ライトアローだ。一方、剣持ちの連中が右上段に構えながらドタドタとこっちにむかって走り出していた。

見る。避ける。

見る。避ける。

剣持ちが近づく。《スペルガン》を手放す。右ストレート。そのまま右前に踏み出して右の裏拳。勢いを殺さず軀を沈め、左手から迫る剣持ちの脚に自分の脚を叩き込む。起きあがりざまに左アッパ！。すぐ右に跳んで相手の肩に右肘。がら空きになった側頭部に左ストレート。その向こうのヤツが剣を振り上げる——が、そいつの側頭部で着弾光が輝く。

「援護は任せて！」

見るとリンは、片膝をつきつつ、両手に持った2丁の《スペルガン》を連続して打ち続けていた。

「当てるなよ！」

「誰に言ってるのよ！」

もはや当初の目的も忘れ、俺たちは敵を殲滅しにかかっていた。

「——あと3分ちよい！」

「じゃ、ウルトラマンになるか」

あれから2度の戦闘をくぐり抜けた俺たちは、汗だくのまま、いかにも胡散臭い両開きの扉を、一緒になって押し開けた。

扉の奥には、軽く直径50メートルはある広々としたドーム場の空間が広がっていた。

床も天井もすべて煉瓦作り。

上に橙色の巨大な光球があるため、室内は驚くほど明るかった。

そんな部屋の中央にいるのは——

「……ドラゴン？」

「……だな」

大きい。動物園で見た象と同じぐらい、あるかもしれない。

全体的なフォルムは恐竜の首長竜に似ている。違いは、全体が鱗に覆われていることと、背中に小さなコウモリの羽根が生えていること、さらに頭部が凶悪だ。巨大な目、突き出た角、鋭い牙、寝息と共に吐き出される炎……

「寝てる？」とリン。

「寝てるな」と俺。

俺たちは顔を見合わせた。

正直なところ……リアルすぎる。ドラゴンが、あまりにもリアルすぎる。

確かに攻撃手段はある。だが、俺もリンも、平和な日本に生きるごく普通の学生にすぎない。巨大生物なんてものは、動物園かTVで見るものと相場が決まっている。間違っても、生身で戦いを挑む相手ではない。それこそ、動物園の檻の中で、象やライオンに喧嘩を売ると同じくらい無謀な行為に思えて仕方がない。

「……怖い？」

リンが尋ねてきた。

「そりゃあ……な」

俺は素直に答えた。

「実はわたしも」

リンは小さく舌を出した。

思わず見とれた。

あつ、かわいい——なんて思ってしまった。

不覚だ。

というか、そういう状況じゃないだろ、今は。

「あつ」

リンがつぶやく。

「……時間」

「ああ……」

慌ててウィンドウを開く。左下には無情にも“23 July 20X0 11:00:05”と表示されていた。ビビっているうちに3分が過ぎてしまったのだ。

「どうしよう」

リンは見上げながら尋ねてきた。

「どうするって……」

打ち合わせ通りにやるなら、今日のチャレンジはこれで終了ということになる。いや、地下5階に下りる前の話を優先すれば、クリアするまでリンは付き合う予定になってる。だが、相手が相手だ。正直、俺も腰が引けている。リンもそうだ。だからこそ、俺に尋ねてきたのだ。これからどうするのか、と。

「……」

俺は目を閉じた。

立ち止まっている間に疲労は回復、汗も消えていた。

「よしっ」

俺は両目を開け、両手に1丁ずつ《スペルガン》を持った。マネキンたちがドロップしたものだ。他にも《ブロードソード》や《ス

ピア》なんかも、カード化した状態でウィンドウに収納してある。
一緒に拾ったカードリッジカードは、他と一緒に、全部呼び出した
上で左腰のカードホルダーに差し込み済みだ。これで呼び出し手順
を経ることなく、いつでも弾倉を具現化できるのだ。

「決めた」

「うん」

「玉碎で終わる。どうだ？」

「……やるの？」

「やる」

「……どうしても？」

「恐いのは最初だけだ——多分」

リンは再び部屋の中を覗き込んだ。

「これって……遊び（ゲーム）だよね？」

「^{ゲーム}仮想現実だな」

「……恐くない？」

「恐い。めちゃくちゃ」

「恐がつてるように見えないけど」

「これでも？」

俺は銃を持つ右手をあげた。かすかに震えている。情けない限り
だが、本当に俺は怯えているのだ。

「………うん」

長い沈黙のあと、リンは頷いた。

リンも両手に《スペルガン》を構えた。俺と同じ2丁拳銃だ。

「途中で逃げるとかないわよね？」

「逃げるわけないだろ」

「絶対？」

「当たり前だろ。相棒置いて、おめおめ逃げられるか」

「……OK、相棒」

ようやくリンの口元に笑みが浮かんだ。

「じゃあ、気合い入れて行くわよ」

「OK、相棒」

俺たちは右手の甲と左手の甲を叩き合わせてから、思いきって部屋に飛び込んでいった。

「なによ！ 弱いくせにデカイ面してんじゃないわよ！ この！ この！ この！」

リンは倒れたドラゴンの躰を蹴りつけていた。

まあ……気持ちはわかる。

戦闘開始から、わずか1分——時計回りに走りながら、二丁拳銃で200発近い弾を撃ち込んでみると、炎を吐きかけていたドラゴンが、突如としてよろめき、あろうことか、そのまま倒れてしまった。しかも今は、尻尾のほうがゆっくりと分解している。

一応、ラスボス扱いなので、雑魚のように一瞬で消えないようだ。つまり。

「これでクリア……か？」

俺は誰にともなく尋ねてみた。

なんと言うか、拍子抜けもいいところだ。

でも、これはゲームなのだから、実際にはこんな感じだろう。というか、そもそもここは初心者用のチュートリアル的なフィールドだ。俺たちでさえ苦戦するような難敵がいたとなれば、それは別の意味で問題になるはずだ。

「ああ、もう！ あんなに恐がってたこっちが馬鹿みたいじゃない！」

リンは濃褐色の頬を真っ赤に染めながら俺のいるところまで戻っ

てきた。

俺はドラゴンの頭の近くに立っている。リンは消滅が始まった尻尾を確認に行った帰りに、八つ当たりとばかりに背中を蹴りつけていた、という次第だ。

とにもかくにも。

「これだと10分オーバーぐらいでおさまるんじゃないか？」

「……だね」

リンもウィンドウを開き、時間を確認した。

現在、11時7分。

もし俺たちが尻込みしていなければ、間違いなく11時前に終わっていたと思う。

「でもさ——これから、どうなるの？」

「知るかよ」

消滅が頭部に達し、とうとうドラゴンの頭も消え去った。その後だった。

——リンゴーン、リンゴーン、リンゴーン

教会の鐘の音が室内に響き渡った。

俺たちはうるたえながら周囲を見回した。

——よくぞ試練を克服した！

朗々とした壮年男性の声が響き渡った。

——我は至高の魔杖、ファンタジア！ 汝らをこの世界に召喚せしものなり！

「イベント？」

「……っばいな」

——我は最後の十二英雄、エレインの名のもとに、汝らが正当なる《青》の魔杖師であることを、ここに承認する！ ゆえに我は、汝らに道標を示す！ 汝らを召喚せし、真の理由をここに明かすものとする！

真の理由？ 公開されていない裏設定でもあるのか？

——我を求めよ！

ファンタジアは宣言した。

——世界に散らばる十二の鍵を探し出し、我を求めよ！　そこに全てがある！

再び教会の鐘が鳴り響いた。

スーッと周囲が暗くなる。

「シン……」

「ここにいます」

すぐ周囲が明るくなった。室内の様子は、ドラゴンが消えたことを除けば何も変わっていない。傍らにはリンがいるし、俺も《スぺルガン》を握りしめたままだ。

「あつ、扉が……」

見ると、開いていたはずの扉が閉まっていた。

「……あそこから出るってことか？」

「……かな？」

俺たちは小首を傾げながら、とりあえず片方の《スぺルガン》を収納、片方をホルスターに差し込み、2人一緒に締まっている扉へと近づいてみた。

軽く触れていると、押してもいないのに両開きの扉が勝手に開いていった。

まぶしい光が差し込んだ。

潮の香りがした。

（——潮？）

扉の外は——中央広場だった。

人が集まっていた。

どよめきが起きていた。

「……………」

「……………」

俺とリンは顔を見合わせた。なにがなんだか、サッパリだった。

トカゲ人間と美女・美少女ばかりということは、蒼都の中央広場で間違いないと思われる。ただ、周囲に集まる100……いや、2

00人近いテスターたちは、どういうわけか扉の周囲10メートルから先に近づけないらしい。

だが、例外もいるようだ。

「おめでとうございます」

真正面に、古代ローマのトーガを身につけた男性が立っていた。距離は3メートルぐらい。壁があるなら、それを越えてやってきたことになる。

「いやあ、それにしてもさすがですね。まさか公開直後に、それも最初の挑戦で、2時間もかからずクリアするとは」

俺はピンときた。

だが、先に尋ねたのはリンのほうだった。

「スタッフの方……ですか？」

「はい。今日から配属になった、蒼都市長のセイリユウです」

ただでさえ細い糸目をさらに細目ながらセイリユウと名乗ったスタッフは、じつくりと俺とリンのことを見つめた。

「まあ、あなた方には簡単すぎたかもしれませんね」

「わたしたちのことを……？」

「ええ、スタッフの間では有名ですよ。蒼都のコロセウムに14日間も隔離されただけでなく、スタッフでさえ匙を投じているオールS、2回もやりとげたおふたりですからね」

「覗いてのか」

俺は鋭く睨みながら尋ねた。

「全部ではありませんよ？」

蒼都市長はなだめるように両手を胸元に上げた。

「ご存じかもしれませんが、PVはすべての入出力を脳神経系に依存しています。つまりPVの中の出来事は、PVにログインしていないと把握できないんですよ。そのうえ、ここでの映像や音声を外に持ち出す方法も研究途上です。逆に外から持ち込むのは、とんでもなく簡単なんですけどね。なかなか思うようにいかないものです」

「それで？」と俺。

「ですから」

蒼都市長は穏やかに微笑んだ。

「監視といっても、外部から調べられる情報といったら、ログインとログアウトの時間、フラグのオンオフ、あとはウィンドウで閲覧できるような情報ぐらいでして……まあ、肉眼による監視を行っていたことは認めます。お気づきにならなかったと思いますが、隔離されてからのあなた方には、念のため、監視用の使い魔を貼り付けていました。もし、何かあったら時、困りますから」

「……だったら強制的に移動させれば良かっただろ」

「そう要請されたら、即座に対応するつもりでした。ですが……そうしなかったおかげで、私たちも、とても良い勉強をさせてもらいました」

「どういうことですか？」

どんどん険悪になる俺に変わって、リンが口早に尋ねた。

「トレーニングのメニューです」

蒼都市長は穏やかに答えた。

「それに、なにはおいても、戦い方です。地下5階でのブラックドルとの戦い。あれはお見事でした。うちで最も腕の立つスタッフも、筋がいいと太鼓判をおしたほんです。よろしければこのあと、いろいろと意見をお尋ねしたいところなんです……」

「予定が詰まってる」

俺はリンを見た。リンは市長と俺とを交互に見ている。

「だから、さつさとログアウトさせる」

「シン……」

「いえ、お気になさらずに。事情は把握しています」
「やっぱり盗聴もしてたのか。」

「ってことは、ドラゴンを見てビビってたところも、生中継で見てたんだな。」

くそつ、なんか腹が立ってきた。

「では手早く終わらせましょう。おっほん」

蒼都市長はわざとらしい咳払いをした。

「えーっ……おめでとうございます。あなた方は“試練場”を、世界で最初に突破した魔杖師です。その栄誉をたたえ、ここに紋章^{クレスト}を授与します」

「んっ」と俺。

「きゃっ」とリン。

不意に胸元が熱くなったのだ。痛みすら伴う熱さだ。見るとリンも胸元を押さえていた。

「おやおや……」

蒼都市長がなにやら意味深に笑っている。

「……てめえ、なにをやった」

「紋章の授与です。熱くなったところを確認してみてください」

言われるままＴシャツの襟を引っ張ってみると、確かに首の真下、胸の中央に何か奇妙な青い刺青がついていた。

「それがなんであるか、あなた方が自らの手で解き明かしてください」

蒼都市長は穏やかに語った。

「私からの助言はひとつだけです——答えは彼方にあり」

「どこだよ、彼方って」

「私にもわかりません。現場のスタッフには、グランドイベントの情報、まったく降りてこないんです」

俺は市長を見た。

糸目なせいで、表情が読めない。

なんとなく、掌の上で踊らされている感じがした。ムカつきが強まった。

「これで終わりなんだろう？」

「ええ、終わりです」

「だったらどけよ」

「ああ、ログアウトですよ。お急ぎみたいですから、この場で私が。ああ、ログアウト・プレイスは中央広場ってことになりますか

ら」

市長はそう言いながらダブルタップでウィンドウを展開した。

「おい」俺は割り込んだ。「監視、解除しろ」

「ええ、わかりました」

意外なくらい、あっさりとした返事だった。

「私の権限で、ブラックリストから削除しておきます」

「……どうということだ？」

「対象者だけを監視するんです。そういう取り決めでしたので今回は裏技的に使いましたが……ちゃんとお二人がログアウトしたあとで削除しておきます」

「わかった」

だったら文句はない。

「シン」

傍らのリンは、ホッと安堵の吐息をつきながら俺のことを見上げてきていた。

かと思うと、いつものムツとした睨み顔になった。

「あんた、短気すぎ」

「……悪い」

「でも、今回は許す」

リンはバンツと俺の背中を叩いた。

「では、ログアウトしますよ」

市長がウィンドウに触れた。途端、視界が暗転し、独特の浮遊感が襲いかかってきた。

まだ——と言いたかったが、間に合わなかった。

気が付くと俺はP.V.ベッドに寝ていた。

フードがあがっていく。

すぐ立ち上がり、机に向かった。机上の目覚まし時計は11時28分を差していた。

「28分も……」

問題はもうひとつ——リンと次の待ち合わせについて話していな

いことだ。

と思っっていたら。

——キンコーン

かすかに何か聞こえた。

ふと、開けっ放しにしていたノートパソコンを見ると、立ち上げたままにしているSCOP3のウィンドウが展開していた。アドレスコールだ。接続者のHNは“LIN”。

慌ててインカムを付け、受話ボタンをクリック。
新規ウィンドウが開いた。

画面には、色白で、艶やかな黒髪を背に伸ばした、ライトブルーのパジャマを着込む、同世代の女の子の顔が映っていた。

もしもし、シン？

「……リン？」

質問そのいち。あんたのパソコン、カメラついてる？

「ちよい待て」

俺は大急ぎで椅子に座り、透過カメラ——液晶パネル越しに映像を取得するカメラ——の映像取得を始めた。左下の画面に俺が映し出される。俺は迷わず、本番ボタンを押した。

リンは黙り込んだまま、ジッと俺のほうを見ていた。

俺も黙り込んだまま、ジッとリンを見つめた。

……ホントに色が違うだけなんだ

「そうだって言っただろ」

で、リアルなわたしについての感想は？

「胸が小さい」

途端、リンは軀を捻りながら、両手で胸を隠した。その仕草が、いつぞやの胸を隠した時とまったく同じだったので、俺はつい口元を抑えながら顔を背けてしまった。もちろん、不用意に爆笑しないように、だ。

な、なによ！ 小さくて悪かったわね！

「悪い。ホント。悪かった。間違いない、おまえはリンだ。うん。」

間違いない」

そんなの当然じゃない！

「だから悪かったって。それより、急ぐんだろ」

そうだけど……

「文句は次の定時に聞いてやるって」俺は苦笑した。「それでいいだろ？」

リンは一瞬だけ真顔になると、輝くような笑顔を浮かべた。

OK、相棒。逃げるんじゃないわよ、いい？

俺は笑いを堪えながら答えた。

「OK、相棒」

斯くしてゲームは始まった。俺はもう、退屈ではなくなっていた。

LOG・01 ” GAME START ”

End

T
o

B
e

N
e
x
t

C
h
a
p
t
e
r

#01-09(後書き)

続きは <http://bookshelf.jp.n.org/online/online0200.html>

新章の執筆が安定してきたら、暇を見て他の章も転載します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9691z/>

ONLINE

2011年12月30日05時48分発行